

中華的戰略戰術

孫子の兵法

※このページの記述がiTunese Store内で販売されているアプリに無断利用され、無断で販売されています(著作権侵害)。現在、Apple社に連絡しております。

戦略に関しては、古今東西の最良の書が『孫子』であると思われる。クラウゼヴィッツの『戦争論』も孫子にはおよばない。ナポレオンは『孫子』を読み、実戦で生かしている。最近ではこれを「ビジネスに生かす」という観点から説かれているものもある。

当然、軍事戦略の基本を外すわけにはいかない。この基本を押さえずして技巧に走ったとしても、最終目標を見失い、目の前の小さな出来事に翻弄されるのが落ちであろう。

なお、『孫子』にはいくつかの版が発見されている。発見された中では最も古い形と思われる竹簡本をもとに書かれたのが、浅野裕一氏の講談社現代新書版であるが、これは全文解説ではなく、一部抜けている。その部分を金谷氏の岩波文庫版で補い、日本の一般書籍で手に入る最も古い形を再現しようと試みたのが、この電網将校参謀本部版「孫子の兵法」である。十二と十三の順が逆になっているなどはこの理由による。

参考:浅野裕一 『孫子を読む』講談社現代新書(竹簡本を基本)
金谷治訳注 『孫子』岩波文庫(宋本十一家注孫子)

- 金谷治版 にあって浅野本にない部分は[[□□□]]
- 浅野裕一版と大きく違う所は[□□□]で補った



●総説	一 計篇(勝算はどちらにあるか) 二 作戰篇(用兵とはスピードである) 三 謀攻篇(戦わずして勝つ)
●戦術原論	四 形篇(必勝の形をつくる) 五 勢篇(全軍の勢いを操る) 六 虚実篇(無勢で多勢に勝つ方法)
●各論(1)	七 軍争篇(戦場にいかに先着するか) 八 九変篇(指揮官いかにあるべきか) 九 行軍篇(敵情を見抜く) 十 地形篇(六種の地形をどう利用するか)
●各論(2)	十一 九地篇(脱兎のごとく進攻せよ) 十二(十三) 用間篇(スパイこそ最重要員) 十三(十二) 火攻篇(軽々しく戦争を起こすな)



by ISHIHARA Mitsumasa 石原光将



中華的戦略戦術

孫子の兵法

1 総説

一 計篇〈勝算はどちらにあるか〉

●〈無謀な戦争をしてはならない〉

軍事は国家の命運を決する重大事である。だから軍の死生を分ける戦場や、国家の存亡を分ける進路の選択は、くれぐれも明察しなければならない。そこで、死生の地や存亡の道を考えるために五つの基本事項を用い、さらにどこが死生の地でどれが存亡の道かを明らかにするため、彼我の優劣を比較・計量する基準を使って、双方の実状を探る。

基本事項(五事)は、(一)道、(二)天、(三)地、(四)将、(五)法。

(一)道

民衆の意思を君主に同化させる、内政の正しさ。

ふだんからこれが実行されているからこそ、戦争になっても、民衆に統治者と死生を共にさせることができ、民衆は政府の命令に疑いを持たない。

(二)天

陰陽、気温の寒暖、四季の推移のさだめや、天に対する順逆二通りの方法、および天への順応がもたらす勝利など。

(三)地

地形の高低、国土や戦場の広い狭い、距離の遠近、地形の陰しさと平坦さ、軍を敗死させる地勢と生存させる地勢など。

(四)将

物事を明察できる智力、部下の信頼、部下を思いやる仁慈の心、困難にくじけない勇氣、軍隊を維持する厳格さなど、将軍が備える能力。

(五)法

軍隊の部署割りを定めた軍法、軍を監督する官吏の職権を定めた軍法、君主が将軍とかわした軍の指揮権についての軍法など。

およそこれら五つの事項は、いやしくも将軍である以上、だれでも聞き知ってはいるが、その重要性を思い知っている者は勝ち、単にうわべの知識として知っているだけの者は勝てない。

そこで、彼我の死生の地や存亡の道をはっきりさせるため、優劣を具体的に比較・計量する基準(七計)を用いて、実際に両者の実状を探究して

一

孫子曰わく、兵とは国の大事なり。死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり。

故にこれを経[はか]るに五事を以てし、これを校[くら]ぶるに計を以てして、其の状を索[も]と]む。

一に曰わく道、二に曰わく天、三に曰わく地、四に曰わく将、五に曰わく法なり。

道とは、民をして上と意を同うし、これと死すべくこれと生くべくして、危[うたが]わざらしむるなり。

天とは、陰陽・寒暑・時制なり〔、順逆・兵勝なり〕。

地とは、〔高下・広狭・〕遠近・陰易・死生なり。

将とは、智・信・仁・勇・嚴なり。法とは、曲制・官道・主用なり。

凡そ此の五者は、将は聞かざることなきも、これを知る者は勝ち、知らざる者は勝たず。

故に、これを校ぶるにするに計を以てして、其の情を索む。

曰わく、主 孰れか賢なる、将 孰れか能なる、天地 孰れか得たる、法令 孰れか行なわる、兵衆 孰れか強き、士卒 孰れか練[なら]いたる、賞罰 孰れか明らかなると。

吾、これを以て勝負を知る。

二

将 吾が計を聴くときは、これを用うれば必ず勝つ、これを留めん。将 吾が計を聴かざるときは、これを用うれば、必ず敗る、これを去らん。

計、利として以て聴かるれば、乃ちこれが勢を為して、以て其の外を佐[たす]く。勢とは利に因りて権を制するなり。

みるのである。

その内訳は、

- 1: 君主はどちらが民心を掌握できる賢明さを備えているか
- 2: 将軍の能力はどちらが優れているか
- 3: 天地がもたらす利点はどちらにあるか
- 4: 軍法や命令はどちらが徹底しているか
- 5: 兵力数はどちらが強大か
- 6: 兵士はどちらが軍事訓練に習熟しているか
- 7: 賞罰はどちらが明確に実行されているか

といったことである。わたしはこうした比較・計量によって、開戦前からすでに勝敗の行方を察知する。

将軍がわたしのはかりごとに従う場合には、彼を用いたならきつと勝つであろうから留任させる。将軍がわたしのはかりごとに従わない場合には、彼を用いたならきつと負けるであろうからやめさせる。

はかりごとの有利なことがわかって従われたならば、そこで勢ということを手助けとして出陣後の外謀とする。勢とは、有利な状況を見れば、それにもとづいてその場に適した臨機応変の処置を取ることである。

🔴〈戦争とは敵をだますことである〉

戦争とは、敵をだます行為である。

だから、本当は自軍にある作戦行動が可能であっても、敵に対しては、とてもそうした作戦行動は不可能であるかに見せかける。本当は自軍がある効果的な運用のできる状態にあっても、敵に対しては、そうした効果的運用ができない状態にあるかのように見せかける。

また、実際は目的地に近づいていながら、敵に対しては、まだ目的地から遠く離れているかのように見せかける。実際は目的地から遠く離れているにも関わらず、敵に対しては、既に目的地に近づいたかのように見せかける。

こうした、いつも敵にいつわりの状態を示す方法によって、

敵が利益を欲しがっているときは、その利益を餌に敵軍の戦力を奪い取る。

敵の戦力が充実しているときは、敵の攻撃に備えて防禦を固める。

敵の戦力が強大なときは、敵軍との接触を回避する。

敵が怒り狂っているときは、わざと挑発して敵の態勢をかき乱す。

敵が謙虚なときはそれを驕りたかぶらせる。

敵が安楽であるときはそれを疲労させる。

三

兵とは詭道なり。

故に、能なるもこれに不能を示し、用なるもこれに不用を示し、近くともこれに遠きを示し、遠くともこれに近きを示し、利にしてこれを誘い、乱にしてこれを取り、実にしてこれに備え、強にしてこれを避け、怒にしてこれを撓[みだ]し、[[卑にしてこれを驕らせ、佚にしてこれを勞し、親にしてこれを離す]]。其の無備を攻め、その不意に出ず。此れ兵家の勝にして、先きには伝うべからざるなり。

敵が親しみあっているときはそれを分裂させる。
敵が自軍の攻撃に備えていない地点を攻撃する。
敵が自軍の進出を予想していない地域に出撃する。

これこそが兵家の勝ち方であって、そのときどきの敵情に応じて生み出す、臨機応変の勝利であるから、出征する前から、このようにして勝つと予告はできないのである。

㊦〈戦う前に勝敗を知る〉

そもそもまだ会戦もしないうちから廟堂で目算して既に勝つのは、**五事・七計**を基準に比較・計量して得られた勝算が、相手よりも多いからである。まだ戦端も開かぬうちから廟算して勝たないのは、勝算が相手よりも少ないからである。勝算が多い方は実戦でも勝利するし、勝算が少ない方は、実戦でも敗北する。ましてや勝算が一つもないというに至っては、何をかいわんやである。わたしがこうした比較・計算によってこの戦争の行方を観察するに、もはや勝敗は目に見えている。

四

夫れ未だ戦わずして廟算〔びょうさん〕して勝つ者は、算を得ること多ければなり。未だ戦わずして廟算して勝たざる者は、算を得ること少なければなり。算多きは勝ち、算少なきは勝たず。而るを況や算なきに於いてをや。吾れ此れを以てこれを観るに、勝負見〔あら〕わる。



二 作戦篇(用兵とはスピードである)

㊦〈戦争は莫大な浪費である〉

およそ軍隊を運用するときの一般原則としては、軽戦車千台、皮革で装甲した重戦車千台、歩兵十万人の編成規模で、四百キロの外地に兵糧を輸送する形態の場合には、民衆と政府の出費、外国使節の接待費、皮革を接着したり塗り固めたりする膠や漆などの工作材料の購入費、戦車や甲冑の供給などの諸経費に、日ごとに千金もの莫大な金額を投じ続け、そうした念入りな準備の後に、ようやく十万人の軍が出動できるようになる。

こうした外征軍が戦闘するとき、対陣中の敵に勝つまで長期持久戦をすることになれば、自軍を疲労させて鋭気を挫く結果になり、また敵の城を攻囲すれば、戦力を消耗し尽くしてしまい、また野戦も攻城もせずにはいたずらに行軍や露営を繰り返して、長期に渡り軍を国外に張り付けておけば、国家経済は窮乏する。

もし、このような戦い方をして、軍が疲労して鋭気が挫かれたり、あるいは戦力が消耗しきったり、財貨を使い果たしたりする状態に陥れば、それまで中立だった諸侯も、その疲弊につけ込みようとして兵をあげる始末となる。いったんこうした窮地に立ってしまえば、いかに知謀の人でも、善後策を立てることはできない。

一

孫子曰わく、

凡そ用兵の法は、馳車千駟・革車千乗・帯甲十万、千里にして糧を饋〔おく〕るときは、則ち内外の費・賓客の用・膠漆の材・車甲の奉、日に千金を費やして、然る後に十万人の師挙がる。

其の戦いを用〔おこ〕なうや久しければ則ち兵を鈍〔つか〕らせ鋭を挫く。城を攻むれば則ち力屈〔つ〕き、久しく師を暴〔さら〕さば則ち国用足らず。

それ兵を鈍らせ鋭を挫き、力を屈くし貨を殫〔つく〕くすときは、則ち諸侯其の弊に乗じて起こる。智者ありと雖も、その後を善くすること能わず。

故に兵は拙速なるを聞くも、いまだ巧久を睹〔み〕ざるなり。それ兵久しくして国の利する者は、未だこれ有らざるなり。故に尽く用兵の害を知らざる者ば、則ち尽く用兵の利をも知ること能わざるなり。

だから戦争には、少々まずくとも素早く切り上げるということはある、うまくて長引くということはない。そもそも戦争が長期化して国家の利益になったためではない。だから、用兵につきまとう損害を徹底的に知り尽くしていない者には、用兵がもたらす利益を完全に知り尽くすこともできないのである。

㊦〈兵站こそ生命線〉

巧みに軍を運用する者は、民衆に二度も軍役を課したりせず、食糧を三度も前線に補給したりはしない。戦費は国内で調達するが、食糧は敵に求める。このようにするから、兵糧も十分まかなえるのである。

国家が軍隊のために貧しくなる原因は、遠征軍に遠くまで補給物資を輸送するからである。遠征軍に遠方まで物資を輸送すれば、その負担に耐えかねて、民衆は生活物資が欠乏して貧しくなり、国境近くに軍隊が出動すれば、近辺の商工業者や農民たちは、大量調達による物不足につけ込んで、物の値段をつり上げて売ようになる。物価が高騰すれば、政府は平時よりも高値で軍需物資を買い上げることになり、国家財政は枯渇してしまう。国家の財源が底をつけば、民衆に対する課税も厳しさを増す。

こうして前線では国力を使い果たし、国内では人民の家財が底をつく状態になれば、民衆の生活費は普段の六割までもが削られる。一方、政府の経常支出も、戦車の破損や軍馬の疲労、鞍をはじめとする武器や矢や弩、甲冑や楯やおおだて、輸送用に徴発した牛や大車などの損耗補充によって、平時の七割までもが削減される。

だからこそ遠征軍を率いる智将は、できるだけ適地で食糧を調達するよう努める。輸送コストを考えれば、敵の食糧五十リットルを食らうのは、本国から供給される千リットルにも相当し、牛馬の資料となる豆殻やわら三十キログラムは、本国から供給される六百キログラムにも相当する。

そこで、敵兵を殺すのは、奮い立った氣勢によるのであるが、敵の物資を奪い取るのは利益の為である。だから車戦で車十台以上を捕獲したときには、その最初に捕獲した者に賞として与え、敵の旗印を味方のものに取り替えた上、その車は味方のものにたちまじって乗用させ、その兵卒は優遇して養わせる。これが敵に勝って強さを増すということである。

以上のようなわけで、戦勝は勝利を第一とするが、長引くのはよくない。

以上のようなわけで、戦争の利害をわきまえた将軍は、人民の生死の運命を握る者であり、国家の安危を決する主宰者である。

二

善く兵を用うる者は、役は再び籍[せき]せず、糧は三たびは載[さい]せず。用を国に取り、糧を敵に因る。故に軍食足るべきなり。

国の師に貧なる者は、遠師にして遠く輸[いた]せばなり。遠師にして遠く輸さば、則ち百姓貧し。近師なるときは貴売すればなり。貴売すれば則ち財竭[つ]く。財竭くれば則ち以て丘役に急にして、力は中原に屈[つ]き用は家に虚しく、百姓の費、十にその七を去る。公家の費、破車罷馬、甲冑弓矢、戟楯矛櫓、丘牛大車、十にその六を去る。

故に智将は務めて敵に食む。敵の一鍾を食むは、吾が二十鍾に当たり、キ[艸己心]カン[禾干]一石は吾が二十石に当たる。

三

故に敵を殺すものは怒なり。敵の利を取るものは貨なり。故に車戦にして車十乗以上を得れば、其の先ず得たる者を賞し、而してその旌旗を改め、車は雑[まじ]えてこれに乗らしめ、卒は善くしてこれを養わしむ。是れを敵に勝ちて強を益[ま]すと謂う。

四

故に兵は勝つことを貴ぶ。久しきを貴ばず。

故に兵を知るの将は、生民の司命、国家安危の主なり。



三 謀攻篇(戦わずして勝つ)

㊦〈百戦百勝はベストではない〉

およそ軍事力を用いる原則としては、敵国を保全したまま勝つのが最上の策で、敵国を撃破して勝つのは次善の策である。

敵の軍団(一万二千五百人)を保全したまま勝つのが最上の策で、敵の軍団を撃破して勝つのは次善の策である。

敵の旅団(五百人)を保全したまま勝つのが最上の策で、敵の旅団を撃破して勝つのは次善の策である。

敵の大隊(百人)を保全したまま勝つのが最上の策で、敵の大隊を撃破して勝つのは次善の策である。

敵の小隊(五人)を保全したまま勝つのが最上の策で、敵の小隊を撃破して勝つのは次善の策である。

したがって、百度戦闘して百度勝利を収めるのは、最善の方策ではない。戦わずに敵の軍事力を屈服させることこそ、最善の方策なのである。

一

孫子曰わく、

凡そ用兵の法は、国を全うするを上と為し、国を破るはこれに次ぐ。

軍を全うするを上となし、軍を破るはこれに次ぐ。

旅を全うするを上となし、旅を破るはこれに次ぐ。

卒を全うするを上となし、卒を破るはこれに次ぐ。

伍を全うするを上となし、伍を破るはこれに次ぐ。

是の故に百戦百勝は善の善なる者に非ざるなり。戦わずして人の兵を屈するは、善の善なる者なり。

㊦〈城攻めは愚の骨頂〉

だから軍事力の最高の運用法は、敵の策謀を未然に打ち破ることである。

その次は敵国と友好国との同盟関係を断ち切ることである。

その次は敵の野戦軍を撃破することである。

最も劣るのは敵の城を攻撃することである。城を攻めるという方法は、他に手段がなくてやむを得ずに行なう。

城攻めの原則としては、おおだてや城門へ寄せる装甲車を整備し、攻城用の機会を完備する作業は、三カ月も要してやっと終了し、攻撃陣地を築く土木作業も同様に三カ月かかってようやく完了するのである。もし将軍が怒りの感情をこらえきれず、攻撃態勢ができあがるのを待たずに、兵士絶ちにアリのように城壁をよじ登って攻撃するよう命じ、兵員の三分の一を戦死させてもさっぱり城が落ちないのは、これぞ城攻めがもたらす災厄である。

それゆえ、用兵に巧みな者は、敵の野戦軍を屈服させても、決して戦闘によったのではなく、敵の城を陥落させても、決して攻城戦によったのではなく、敵国を撃破しても、決して長期戦によったの

二

故に上兵は謀を伐つ。其の次ぎは交を伐つ。その次は兵を伐つ。その下は城を攻む。攻城の法は、已むを得ざるが為めなり。

櫓・フン[車賁]オン[車温-水]を修め、器械を具うること、三月にして後に成る。踞[キョ]イン[門西土]又た三月にして後に已わる。将 其の忿[いきどお]りに勝[た]えずしてこれに蟻附[ぎふ]すれば、士卒の三分の一を殺して而も城の抜けざるは、此れ攻の災いなり。

故に善く兵を用うる者は、人の兵を屈するも而も戦うに非ざるなり。人の城を抜くも而も攻むるに非ざるなり。人の国を毀[やぶ]るも而も久しきに非ざるなり。必らず全きを以て天下に争う。

故に兵頓[つか]れずして利全うすべし。此れ謀攻の法なり。

三

故に用兵の法は、十なれば則ちこれを囲み、五なれば則ちこれを攻め、倍すれば則ちこれを

ではない。必ず敵の国土や戦力を保全したまま勝利するやり方で、天下に国益を争うのであって、そうするからこそ、軍も疲弊せずに、軍事力の運用によって得られる利益を完全なものとする。

これこそが、策謀で敵を攻略する原則なのである。

そこで、戦争の原則としては、味方が十倍であれば敵軍を包囲し、五倍であれば敵軍を攻撃し、倍であれば敵軍を分裂させ、等しければ戦い、少なければ退却し、力が及ばなければ隠れる。だから小勢なのに強気ばかりでいるのは、大部隊の捕虜になるだけである。

将軍とは国家の助け役である。助け役が主君と親密であれば国家は必ず強くなるが、助け役が主君と隙があるのでは国家は必ず弱くなる。そこで、国君が軍事について心配しなければならないことは三つある。

(一) 軍隊をひきとめる

軍隊が進んではいけないことを知らないで進めと命令し、軍隊が退却してはいけないことを知らないで退却せよと命令する。

(二)

軍隊の事情も知らないのに、軍事行政を将軍と一緒にやると、兵士たちは迷うことになる。

(三)

軍隊の臨機応変の処置もわからないのに軍隊の指揮と一緒にやると、兵士たちは疑うことになる。

軍隊が迷って疑うことになれば、外国の諸侯たちが兵を挙げて攻め込んでくる。こういうのを「軍隊を乱して勝利を取り去る」というのである。

⑤ 〈彼を知り己を知らば〉

そこで、勝利を予知するのに五つの要点がある。

(一) 戦ってよい場合と戦ってはならない場合とを分別している者は勝つ。

(二) 大兵力と小兵力それぞれの運用法に精通している者は勝つ。

(三) 上下の意思統一に成功している者は勝つ。

(四) 計略を仕組んで、それに気づかずにやってくる敵を待ち受ける者は勝つ。

(五) 将軍が有能で君主が余計な干渉をしない者は勝つ。

これら五つの要点こそ、勝利を予知するための方法である。

したがって、軍事においては、相手の実状も知

分かち、敵すれば則能[すなわ]ちこれと戦い、少なければ則能ちよくこれを逃れ、しからざれば則能ちこれを避く。故に小敵の堅は、大敵の擒なり。

四

夫れ将は国の輔なり。輔 周なれば則ち国必ず強く、輔 隙あれば則ち国必ず弱し。故に君の軍に患うる所以の者には三あり。

軍の進むべからざるを知らずして、これに進めと謂い、軍の退くべからざるを知らずして、これに退けと謂う。是れを「軍を糜す」と謂う。

三軍の事を知らずして三軍の政を同じくすれば、則ち軍士惑う。

三軍の権を知らずして三軍の任を同じうすれば、則ち軍士疑う。三軍既に惑い且つ疑うときは、則ち諸侯の難至る。是れを「軍を乱して勝を引く」という。

五

故に勝を知るに五あり。

戦うべきと戦うべからざるとを知る者は勝つ。衆寡の用を識る者は勝つ。上下の欲を同じうする者は勝つ。虞を以て不虞を待つ者は勝つ。将の能にして君の御せざる者は勝つ。

この五者は勝を知るの道なり。

故に曰わく、彼れを知りて己を知れば、百戦して殆[あや]うからず。彼れを知らずして己を知れば、一勝一負す。彼れを知らず己を知らざれば、戦う毎[ごと]に必ず殆うし。

って自己の実情も知っていれば、百たび戦っても危険な状態にならない。相手の実情を知らずに自己の実状だけを知っていれば、勝ったり負けたりする。相手の実情も知らず自己の実状も知らなければ、戦うたびに必ず危険に陥る。



by ISHIHARA Mitsumasa 石原光将



中華的戦略戦術

孫子の兵法 2 戦術原論

四 形篇(必勝の形をつくる)

㊦〈守備は攻撃よりも強力〉

古代の巧みに戦う者は、まず敵軍が自軍を攻撃しても勝つことのできない態勢を作り上げた上で、敵軍が態勢を崩して、自軍が攻撃すれば勝てる態勢になるのを待ちうけた。

敵が自軍に勝てない態勢を作り上げるのは己れに属することであるが、自軍が敵軍に勝てる態勢になるかどうかは敵軍に属することである。だから巧みな者でも、敵軍が決して自軍に勝てない態勢をつくることはできても、敵に態勢を崩して自軍が攻撃すれば勝てる態勢を取らせることはできない。そこで、「敵軍がこうしてくれたら自軍はこうするのに、と勝利を予測することはできても、それを必ず実現することはできない」と言われるのである。

敵が自軍に勝てない態勢とは守備形式のことであり、自軍が敵に勝てる態勢とは攻撃形式のことである。

守備形式を取れば戦力の余裕があり、攻撃形式を取れば戦力が不足する。

古代の巧みに守備する者は、大地の奥底深く潜伏し、好機を見ては天空高く機動した。だからこそ、自軍を敵の攻撃から保全しながら、しかも敵の態勢の崩れを素早く衝いて勝利を逃がさなかったのである。

㊦〈勝利の軍は開戦前に勝利を得ている〉

勝利を読みとるのに一般の人々にもわかるようなものがわかる程度では、最高に優れたものではない。戦争して打ち勝って天下の人々が立派だとほめるのでは、最高に優れたものではない。

だから、細い毛を持ち上げるのでは力持ちといえず、太陽が月が見えるというのでは目が鋭いといえず、雷のひびきが聞こえるというのでは耳が聡いとはいえない。

昔の戦いに巧みと言われた人は、普通の人では見分けのつかない勝ちやすい機会をとらえて、そこで打ち勝ったものである。だから、戦いに巧みな人が勝った場合には、知謀優れた名誉もなければ、武勇優れた手柄もない。そこで、彼が戦

一

孫子曰わく、昔の善く戦う者は先ず勝つべからざるを為して、以て敵の勝つべきを待つ。

勝つべからざるは己れに在るも、勝つべきは敵に在り。故に善く戦う者は、能く勝つべからざるを為すも、敵をして必ず勝つべからしむること能わず。故に曰わく、「勝は知るべし、而して為すべからざる」と。

勝つべからざる者は守なり。勝つべき者は攻なり。守は則ち足らざればなり。攻は則ち余り有ればなり。[[→守らば則ち余り有りて、攻むれば則ち足らず。]]善く守る者は九地の下に蔵[かく]れ、善く攻むる者は九天の上に動く。故に能く自ら保ちて勝を全うするなり。

二

勝を見ること衆人の知る所に過ぎざるは、善の善なる者に非ざるなり。戦い勝ちて天下善なりと曰うは、善の善なる者に非ざるなり。

故に秋毫を挙ぐるは多力と為さず。日月を見るは明目と為さず。雷霆を聞くは聡耳と為さず。

古えの所謂善く戦う者は、勝ち易きに勝つ者なり。故に善く戦う者の勝つや、智名も無く、勇功も無し。故に其の戦い勝ちてたがわず。たがわざる者は、其の勝を措く所、已に敗るる者に勝てばなり。故に善く戦う者は不敗の地に立ち、而して敵の敗を失

<p>争をして打ち勝つことは間違いない。間違いないというのは、その勝利を収めるすべては、既に負けている敵に打ち勝つからである。それゆえ、戦いに巧みな人は絶対の不敗の立場にあって敵の態勢が崩れて負けるようになった機会を逃さないのである。以上のようなわけで、勝利の軍は開戦前にまず勝利を得てそれから戦争しようとするが、敗軍はまず戦争を始めてからあとで勝利を求めるものである。</p>	<p>わざるなり。是の故に勝兵は必ず勝ちて、而る後に戦いを求め、敗兵は先ず戦いて而る後に勝ちを求む。</p>
<p>㊦〈兵法で大事な5つの項目〉</p> <p>戦争の上手な人は、上下の人心を統一させるような政治を立派に行ない(=道)、さらに軍隊編成などの軍政をよく守る(=法)。だから勝敗を自由に決することができるのである。</p> <p>兵法で大事なのは、</p> <p>一:ものさしではかること=度 二:まずめではかること=量 三:数えはかること=数 四:くらべはかること=称 五:勝敗を考えること=勝</p> <p>戦場の土地について広さや距離を考え(度)、その結果について投入すべき物量を考え(量)、その結果について動員すべき兵数を数え(数)、その結果について敵味方の能力をはかり考え(称)、その結果について勝敗を考える(勝)。</p> <p>そこで、勝利の軍は充分の勝算を持っているから、重い目方で軽い目方に比べるように優勢であるが、敗軍では軽い目方で重い目方に比べるように劣勢である。</p>	<p>三 善く兵を用うる者は、道を修めて法を保つ。故に能く勝敗の政を為す。</p> <p>四 兵法は、一に曰わく度[たく]、二に曰わく量、三に曰わく数、四に曰わく称、五に曰わく勝。地は度を生じ、度は量を生じ、量は数を生じ、数は称を生じ、称は勝を生ず。 故に、勝兵は鎰を以て銖を称[はか]るが若く、敗兵は銖を以て鎰を称るが若し。</p>
<p>㊦〈積水を千仞の谷に〉</p> <p>彼我の勝敗を計量する者が、人民を戦闘させるにあたり、満々とたたえた水を千仞の谷底へ決壊させるように仕組むのは、それこそが勝利に至る態勢なのである。</p>	<p>五 勝者の民を戦わしむるや[[→勝を称る者の民を戦わすや]]、積水を千仞の谿に決するが若き者は、形[かたち]なり。</p>



五 勢篇(全軍の勢いを操る)

<p>㊦〈分数、形名、奇正、虚実〉</p> <p>およそ戦争に際して、大勢の兵士を治めていてもまるで少人数を治めているように整然といくのは、部隊の編成(分数)がそうさせるのである。</p> <p>大勢の兵士を戦闘させてもまるで少人数を戦闘させているように整然といくのは、旗や鳴りものなどの指令の設備(形名)がそうさせるのである。</p>	<p>一 孫子曰わく、 凡そ衆を治むること寡を治むるが如くなるは、分数是れなり。 衆を闘わしむること寡を闘わしむるが如くなるは、形名是れなり。 三軍の衆、必らず敵に受[こた]えて敗なからしむべき者は、奇正是れなり。</p>
---	---

大軍の大勢の兵士が敵の出方にうまく対応して決して負けることのないようにさせることができるのは、変化に応じて処置する奇法と、定石どおりの正法の使い分け(奇正)がそうさせるのである。

戦争が行なわれるといつでもまるで石を卵にぶつけるようにたやすく敵を打ちひしぐことのできるのは、充実した軍隊ですきだらけの敵を撃つ虚実の運用(虚実)がそうさせるのである。

②<奇と正は混沌としている>

およそ戦闘というもの、定石どおりの正法で不敗の地に立って敵と会戦し、状況の変化に適応した奇法で打ち勝つのである。したがって、うまく奇法をつかう軍隊では、その変化は天地の動きのように窮まりなく、長江や黄河のように尽きることがない。終わっては繰り返して始まる四季のように、暗くなってまた繰り返して明るくなる日月のようである。

音は宮・商・角・徴・羽の五つにすぎないが、その五音階の混じり有った変化はとても聞き尽くせない。色は青・黄・赤・白・黒の五色に過ぎないが、その五つの混じりあった変化はとても見尽くせない。味は酸・辛・しおから(酉咸)・甘・苦の五つに過ぎないが、その五つの混じりあった変化はとても味わい尽くせない。

戦闘の勢いは奇法と正法の二つに過ぎないが、その混じりあった変化はとても窮め尽くせるものではない。奇法と正法が互いに生まれでてくるありさまは、丸い輪をぐるぐる回って終点のないようなものである。だれにそれが窮められようか。

③<勢いのメカニズム>

水が激しく流れて石をも漂わせるに至るのが、勢いである。

猛禽が急降下し、一撃で獲物の骨を打ち砕くに至るのが、節目である。

だから、巧みに戦うものは、その戦闘突入の勢いは限度いっぱい蓄積されて陰しく、その蓄積した力を放出する節目は一瞬の間である。勢いを蓄えるのは弩の弦をいっばいに張るようなものであり、節目は瞬間的に引き金を引くようなものである。

混乱は整治から生まれる。憶病は勇敢から生まれる。軟弱は剛強から生まれる。

乱れるか治まるかは部隊の編成(分数)の問題である。憶病になるか勇敢になるかは、戦いの勢いの問題である。弱くなるか強くなるかは、軍の態勢(形)の問題である。

そこで、巧みに敵を誘い出すものは、敵にわか

兵の加うるところ、タン[石段]を以て卵に投ずるが如くなる者は、虚実是れなり。

二

凡そ戦いは、正を以て合い、奇を以て勝つ。故に善く奇を出だす者は、窮まり無きこと天地の如く、竭きざること江河の如し。終わりに復た始まるは、四時是れこれなり。死して更[こもごも]生ずるは日月これなり。

声は五に過ぎざるも、五声の変は勝[あ]げて聴くべからず。

色は五に過ぎざるも、五色の変は勝げて観るべからず。

味は五に過ぎざるも、五味の変は勝げて嘗[な]むべからず。

戦勢は奇正に過ぎざるも、奇正の変は勝げて窮むべからず。奇正の相生ずることは、循環の端なきが如し。孰[た]れか能くこれを窮めんや。

三

激水の疾[はや]くして石を漂すに至る者は、勢なり。

鷲鳥の撃ちて毀折に至る者は、節なり。

是の故に善く戦う者は、其の勢は陰にして其の節は短なり。勢は弩をひ[弓廣]くがごとく、節は機を発するが如し。

紛々紜々として闘い乱れて、見出すべからず。渾々沌々として形円くして、敗るべからず。

[→軍争編四]

四

乱は治に生じ、怯は勇に生じ、弱は強に生ず。

治乱は数なり。勇怯は勢なり。強弱は形なり。

五

故に善く敵を動かす者は、これに形すれば敵必らずこれに従

るような形を示すと敵はきっとそれについてくるし、敵に何かを与えると敵はきっとそれを取りに来る。利益を見せて誘い出し、裏をかくてそれに当たるのである。

い、これに予[あた]うれば敵必らずこれを取る。利を以てこれを動かし、詐を以てこれを待つ。

㊦〈指揮官は兵を選ばない〉

したがって巧みに戦う者は、戦闘に突入する勢いによって勝利を得ようとし、兵士の個人的勇気には頼らずに、軍隊を運用する。そこで巧妙に戦う者は、人々を選抜し適所に配置して、軍全体の勢いに従わせるようにする。兵士たちを勢いに従わせる者が兵士を戦わせるさまは、まるで木や石を転落させるようである。木や石の性質は、平らなところに安定していれば静止しているが、傾斜した場所では運動し始め、方形であればとどまっているが、円形であれば転がり始める。だから兵士たちを巧みに戦闘させる勢いが、丸い石を先陣の山から転落させたようになるよう仕向けるのが、戦闘の勢いというものである。

六

故に善く戦う者は、これを勢に求めて人に責めず、故に善く人を扱[えら]びて勢に任せしむ。勢に任ずる者は、[[→故に善く戦う者は、これを勢に求め、人に責めずして、これが用を為す。故に善く戦う者は、人を扱びて勢に与[したが]わしむること有り。勢に与わしむる者は、]]その人を戦わしむるや木石を転ずるがごとし。木石の性は、安ければ則ち静かに、危うければ則ち動き、方なれば則ち止まり、円なれば則ち行く。故に善く人を戦わしむるの勢い、円石を千仞の山に転ずるが如くなる者は、勢なり。



六 虚実篇(無勢で多勢に勝つ方法)

㊦〈主導権を握る〉

先に戦場において敵軍の到着を待ち受ける軍隊は安楽だが、あとから戦場にたどり着いて、休む間もなく戦闘に駆けつける軍隊は疲労する。したがって巧みに戦う者は、敵軍を思うがままに動かして、決して自分が敵の思うままに動かされたりはしない。

来てほしい地点に敵軍が自分から進んでやって来るようにさせられるのは、利益を見せびらかすからである。やって来てほしくない地点に敵軍が来られないようにさせられるのは、害悪を見せつけるからである。

敵が腰を落ち着けて休息をとり、安楽にしていれば、それを引きずり回して疲労させることができ、満腹していればそれを飢えさせることができるのは、敵が必ず駆けつけてくる要地に出撃するからである。

千里もの長距離を遠征しながら危険な目にあわないのは、敵兵がいない地域を進軍するからである。

攻撃すれば決まって奪取するのは、そもそも敵が守備していない地点を攻撃するからである。

守備すれば決まって堅固なのは、そもそも敵が攻撃してこない地点を守るからである。

一

孫子曰わく、凡そ先に戦地に処[お]りて敵を待つ者は佚し、後れて戦地に処りて戦いに趨[おもむ]く者は勞す。故に善く戦う者は、人を致して人に致されず。能く敵人をして自ら至らしむる者はこれを利すればなり。能く敵人をして至るを得ざらしむる者はこれを害すればなり。故に敵 佚すれば能くこれを勞し、飽けば能くこれを饑[う]えしめ、[[安んずれば能くこれを動かす。]]

二

其の必らず趨く所に出で、[～飢えしむる者は、その必ず趨く所に出ずればなり。][[其の意[おも]わざる所に趨き、]]千里を行いて勞[つか]れざる者は、無人の地を行けばなり。攻めて必らず取る者は、其の守らざる所を攻むればなり。守りて必らず固き者は、其の攻めざる所を守ればなり。故に善く攻むる者には、敵 其の守る所を知らず。善く守る者には、敵 其の攻むる所を知らず。微なるかな微なるかな、無形に至る。神なるかな神なるかな、無声に至る。故

このようにするから、攻撃の巧みな者にかかる
と、敵はどこを守ればよいのか判断できず、首尾
の巧みな者にかかる、敵はどこを攻めればよい
のか判断できない。微妙、微妙、最高は無形にま
で到達する。神業、神業、最高は無音にまで到達
する。だからこそ、敵の死命を制する主催者とな
れるのである。

に能く敵の司命を為す。

㊦〈敵をあやつる〉

自軍が進撃しても、決して敵軍がそれを迎え撃
てないのは、その進撃路が敵の兵力配備の隙を
衝くからである。

自軍が退却しても、決して敵軍が阻止できない
のは、その退却路が遠すぎて追撃できないから
である。

そこで、自軍が戦いを望めば、敵がどうしても自
軍と戦わなければならなくなるのは、敵が絶対に
救援に出てくる地点を攻撃するからである。自軍
が戦いを望まなければ、地面に防衛戦を描いて
そこを守っただけで、敵が決して防衛戦を突破し
て自軍と戦ったりできないのは、敵の進路をあら
ぬ方向にそらすからである。

三

進みて禦[ふせ]ぐ[迎う]べからざる者は、其の虚を衝けばなり。退きて追う[止む]べからざる者は、速かにして及ぶべからざればなり。故に我れ戦わんと欲すれば、[[敵 壘を高くし溝を深くすと雖も、]]我れと戦わざるを得ざる者は、其の必らず救う所を攻むればなり。我れ戦いを欲せざれば、地を画してこれを守ると雖も、敵 我れと戦うを得ざる者は、其の之[ゆ]く所に乖[そむ]けば[あざむけば]なり。

㊦〈兵力を集中せよ〉

そこで巧みに軍を率いる者は、敵軍には態勢を
あらわにさせておきながら、自軍の側は態勢を隠
したまま(無形)にするから、自軍は兵力を集中す
るが、敵軍はすべての可能性に備えようとして兵
力を分散する。

自軍は集中して全兵力が一つの部隊となり、敵
軍は分散して十の部隊になれば、それは敵の十
倍の兵力で、味方の十分の一の敵を攻撃するこ
とを意味する。自軍の兵力が全体としては寡少
で、敵軍の兵力が全体としては強大であっても、
その小兵力で敵の大軍を撃破できるのは、個々
の戦闘において合同して戦う自軍の兵力が一つ
に結集しているからである。

自軍が全兵力を集結して戦おうとする地点を予
知できないから、敵が兵力を配備する地点は多
くなる。敵が兵力を配置する地点が増えれば、そ
れぞれの地点で自軍と戦う兵力は手薄になる。
全面に備える者は後方が手薄になり、左翼に備
える者は右翼が手薄になり、すべての方面に備
えようとする者は、あらゆる地点が手薄になる。

それぞれの地点の兵力が手薄になるのは、相
手の出現に備える受け身の立場だからである。
常に会戦地点での兵力が優勢になるのは、相手
を自軍の出現に備えさせる主体的な立場だから
である。

戦いが起こる地点が事前に判明しているなら
ば、たとえ千里の遠方であっても船長に到着して

四

故に[善く将たる者は、]人を形せしめて我れに形無ければ、則ち我れは専[あつ]まりて敵は分かる。我れは専まりて一と為り敵は分かれて十と為らば、是れ十を以て其の一を攻むるなり。則ち我れは衆にして敵は寡なり。能く衆を以て寡を撃てば、則ち吾が与[とも]に戦う所の者は約なり。

吾が与に戦う所の地は知るべからず、吾が与に戦う所の地は知るべからざれば、則ち敵の備うる所の者多し。敵の備うる所の者多ければ、則ち吾が与に戦う所の者は寡[すく]なし。故に前に備うれば則ち後寡なく、後に備うれば則ち前寡なく、左に備うれば則ち右寡なく、右に備うれば則ち左寡なく、備えざる所なければ則ち寡なからざる所なし。寡なき者は人に備うる者なればなり。衆[おお]き者は人をして己れに備えしむる者なればなり。故に戦いの地を知り戦いの日を知れば、則ち千里にして会戦すべし。戦いの地をしらず戦いの日知らざれば、則ち左は右を救うこと能わず、右は左を救うこと能わず、前は後を救うこと能わず、後は前を救うこと能わず。

戦える。戦いが起こる日時も予知できず、戦いが起こる地点も予知できないのでは、前衛は後衛を救援できず、後衛は前衛を救援できず、左翼は右翼を救援できず、右翼は左翼を救援できない。ましてや、遠い場合では数十里、近い場合でも数里先の遊軍に対しては、なおさら間に合わないのだ。

以上のことから、わたしが呉と越の戦争の行方を予測してみますと、越の総兵力がどれだけ多くても、何ら勝利の助けにはなりません。こうしたり優から、勝利は思いのままにできましようとして申し上げたのです。たとえ敵の総兵力がどんなに強大でも、闘えないようにできるのです。

そこで、戦いの前に敵の虚実を知るためには、敵情を目算してみても利害損得の見積もりを知り、敵軍を刺激して動かしてみても、その行動の基準を知り、敵軍のはっきりした態勢を把握して、その敗死すべき地勢と破れない地勢とを知り、敵軍と小ぜりあいしてみても、優秀なところと手薄な所を知る。

そこで、軍の態勢の極致は、態勢を隠したままにすることである。態勢が隠れていれば、深く入り込んだスパイでもかぎつけることができず、知謀すぐれた者でも考え慮ることができない。相手の態勢が読みとれれば、その態勢に乗じて勝利が得られるのであるが、一般の人にはそれを知ることができない。人々はみな、味方の勝利のありさまを知っているが、味方がどのようにして勝利を決定したかというありさまは知らないのである。だから、その戦って打ち勝つありさまには二度と繰り返しがなく、相手の形のままに対応して窮まりがないのである。

そもそも、軍の態勢は水の状態のようなものである。水の流れは高いところを避けて低いところへと走るが、軍の態勢も、敵が備えをしている実のところを避けて隙のある虚のところを攻撃する。水は地形のままに従って流れを定めるが、軍も敵情のままに従って勝利を決する。だから、軍には決まった勢いというものがなく、水には決まった形というものがなく、うまく敵情のままに従って変化して勝利を勝ち取ることのできるのが、計り知れない神業というものである。

而るを況や遠き者は数十里、近き者は数里なるをや。吾れを以てこれを度[はか]るに、越人の兵は多しと雖も、亦た奚[なん]ぞ勝に益せんや。敵は衆しと雖も、闘い無からしむべし。

五

故にこれを策[はか]りて得失の計を知り、これを作[おこ]して動静の理を知り、これを形[あらわ]して死生の地を知り、これに角[ふ]れて有余不足の処を知る。

六

故に兵を形すの極は、無形に至る。無形なれば、則ち深間も窺うこと能わず、智者も謀ること能わず。形に因りて勝を錯[お]くも、衆は知ること能わず。人皆な我が勝の形を知るも、吾が勝を制する所以の形を知ること莫し。故に其の戦い勝つや復[くりかえ]さずして、形に無窮に應ず。

七

夫れ兵の形は水に象[かたど]る。水の行は高きを避けて下[ひく]きに趨[おもむ]く。兵の形は実を避けて虚を撃つ。水は地に因りて流れを制し、兵は敵に因りて勝を制す。故に兵に常勢なく、水に常形なし。能く敵に因りて変化して勝を取る者、これを神と謂う。

〔故に五行に常勝なく、四時に常位なく、日に短長あり、月に死生あり。〕



1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

中華的戦略戦術

孫子の兵法 3 各論(1)

七 軍争篇(戦場にいかにか先着するか)

① 強行軍は危険な賭け

およそ軍を運用する方法としては、将軍が君主の出撃命令を受けてから、軍を編成し兵士を統率して、敵軍と対陣して静止するまでの過程で、戦場への軍の先着を争う「軍争」ほど困難な作業はない。

軍争の難しさは、迂回路を直進の近道に変え、憂いごとを利益に転ずる点にある。だから、一見戦場に遠い迂回路を取りながら、敵を利益で誘い出してきて、敵よりあとに出発しながら戦場を手元に引き寄せて敵よりも先に戦場に到着するというのは、迂回路を直進の近道に変える計謀を知るものである。

軍争はうまくやれば利益となるが、軍争は下手をすると危険をもたらす。もし全軍をあげて戦場に先着する利益を得ようと競争すれば、大軍では機敏に動けず、先に戦場に到着できない。軍全体にかまわずに利益を得ようと競争すれば、輜重部隊は後方に捨て去られてしまう。

こうしたわけで、重い兜を脱いで背負って走り、昼夜休まずに走行距離を倍にして強行軍を続け、百里かなたで利益を得ようと競争すれば、上軍・中軍・下軍の三将軍そろって捕虜にされる。強健な兵士は先になり、疲労した兵士は落後して、その結果は十人中一人がたどり着くにすぎない。

同じ方法で、五十里かなたで利益を得ようと競争すれば、先鋒の上将軍を敗死させ、その比率は半分が到着するにとどまる。

同じ方法で、三十里かなたで利益を得ようと競争すれば、三分の二だけが到着する。

このように、軍が輸送部隊を失えば敗亡するし、兵糧を失えば敗亡するし、財貨の蓄えを失えば敗亡するのである。

そこで、諸侯たちの腹の内がわからないのでは、前もって同盟することはできない。

山林・険しい地形・沼沢地などの地形がわからないのでは、軍隊を進めることはできない。

その土地の案内役を使えないのでは、地形の利益を収めることはできない。

一

孫子曰わく、
凡そ用兵の法は、将 命を君より受け、軍を合し衆を聚[あつ]め、和を交えて舍[とど]まるに、軍争より難きは莫し。軍争の難きは、迂を以て直と為し、患を以て利と為す。故に其の途を迂にしてこれを誘うに利を以てし、人に後れて発して人に先きんじて至る。此れ迂直の計を知る者なり。

故に軍争は利たり、軍争は危たり。軍を挙げて利を争えば則ち及ばず、軍を委[す]てて利を争えば則ち輜重損[す]てらる。是の故に、甲を巻きて趨[はし]り、日夜処[お]らず、道を倍して兼行し、百里にして利を争うときは、則ち三将軍を擒[とりこ]にせらる。勁[つよ]き者は先きだち、疲るる者は後れ、其の率十にして一至る。五十里にして利を争うときは、則ち上将軍を蹶[たお]す。其の率 半ば至る。三十里にして利を争うときは、則ち三分の二至る。是れを以て軍争の難きを知る。

是の故に軍に輜重なければ則ち亡び、糧食なければ則ち亡び、委積なければ則ち亡ぶ。

二

故に諸侯の謀を知らざる者は、予め交わる事能わず。山林・険阻・沮沢の形を知らざる者は、軍を行[や]ること能わず。郷導を用いざる者は、地の利を得ること能わず。

②<変幻自在の進撃>

そこで、軍事行動は敵をあざむくことを基本とし、利益にのみ従って行動し、分散と集合の戦法を用いて臨機応変の処置を取るのである。

だから、疾風のように迅速に進撃し、林のように静まり返って待機し、火が燃え広がるように急激に侵攻し、山のように居座り、暗闇のように実態を隠し、雷鳴のように突然動きだし、偽りの進路を敵に指示するには部隊を分けて進ませ、占領地を拡大するときは要地を分守させ、権謀をめぐらせつつ機動する。【其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山、難知如陰、動如雷震、掠郷分衆、廓地分利、懸権而動】

迂回路を直進の近道に変える手を敵に先んじて察知するのは、これこそが軍争の方法なのである。

③<鳴り物や旗>

古い兵法書には「口で言ったのでは聞こえないから、太鼓や鐘の鳴り物を備える。指し示しても見えないから、旗やのぼりを備える」とある。

そもそも、鳴り物や旗の類というのは、兵士たちの耳目を統一するものである。兵士たちが集中統一されているからには、勇敢な者でも勝手に進むことはできず、臆病な者でも勝手に退くことはできない。したがって、乱れに乱れた混戦状態になっても、乱されることがなく、曖昧模糊で前後もわからなくなっても打ち破られることがない。これが大部隊を働かせる方法である。

だから、夜の戦いには火や太鼓をたくさん使い、昼の戦いには旗やのぼりをたくさん使うのは、兵士たちの耳目を変えさせるためのことである。

④<敵の軍隊の気力を奪う>

こうして敵兵の耳目も欺くことができるのだから、敵の軍隊の気力を奪い取ることができ、敵の將軍の心を奪い取ることもできる。

そういうわけで、(朝方の気力は鋭く、昼頃の気力は衰え、暮れ方の気力は尽きてしまうものであるから)戦争の上手な人は、その鋭い気力を避け、衰えて休息を求めているところを撃つが、それが敵の軍隊の気力を奪い取って、気力について打ち勝とうとするものである。

また、治まり、整った状態で、混乱した相手に当たり、冷静な状態でざわめいた相手に当たるが、それが敵の將軍の心を奪い取って、心について打ち勝とうとするものである。

また、戦場の近くにおいて、遠くからやってくるの

三

故に兵は詐を以て立ち、利を動き、分合を以て変を為す者なり。故に其の疾[はや]きこと風の如く、其の徐[しずか]なることは林の如く、侵掠することは火の如く、動かざること山の如く、知り難きことは陰の如く、動くことは雷の震うが如くにして、郷を掠[かす]むるには衆を分かち郷[むか]うところを指[しめ]すに衆を分かち、地を廓[ひろ]むるには利を分かち、権を懸けて而して動く。迂直の計を先知する者は[[勝つ。]]此れ軍争の法なり。

四

軍政に曰わく、「言うとも相い聞えず、故に鼓鐸を為[つく]る。視[しめ]すとも相い見えず、故に旌旗を為る」と。

夫れ金鼓・旌旗なる者は人の耳目を一にする所以なり。人既に専一なれば、則ち勇者も独り進むことを得ず、怯者も独り退くことを得ず。紛々紜々[ふんふんうんうん]、鬪乱して見るべからず、渾渾沌沌、形円くてして敗るべからず。此れ衆を用うるの法なり。

故に夜戦に火鼓多く昼戦に旌旗多きは、人の耳目を変うる所以なり。

故に三軍には気を奪うべく、將軍には心を奪うべし。

是の故に朝の気は鋭、昼の気は惰、暮れの気は帰。故に善く兵を用うる者は、其の鋭気を避けて其の惰帰を撃つ。此れ気を治むる者なり。

治を以て乱を待ち、静を以て譁[か]を待つ。此れ心を治むる者なり。

近きを以て遠きを待ち、佚を以て勞を待ち、飽を以て飢を待つ。此れ力を治むる者なり。

正々の旗を邀[むか]うること無く、堂々の陳[じん=陣]を撃つこと勿し。此れ変を治むる者なり。

を待ち受け、安楽にしている疲労した相手に当たり、腹いっぱいできて飢えた相手に当たるが、それは**戦力**について打ち勝とうとするものである。

また、よく整備した旗並びには戦いを仕掛けることをせず、堂々と充実した陣立てには攻撃をかけないが、それは**敵の変化**について打ち勝とうとするものである。

ゆえに、戦争の原則としては、高い陵にいる敵を攻めてはならず、丘を背にして攻めてくる敵は迎え撃ってはならず、偽りの誘いの退却は追いかけてはならず、鋭い氣勢の敵兵には攻めかけてはならず、こちらを釣りにくる餌の兵士には食いついてはならない。



八 九変篇(指揮官いかにあるべきか)

①〈臨機応変に対処する〉

およそ軍隊を運用する方法としては、将軍が君主の出動命令を受けて、軍を編成し、兵士を統率しながら進撃するにあたり、

(一)ヒ地:足場の悪い土地には、宿営してはならない。

[大部隊の行軍が渋滞し、攻撃を受けても迅速な対応が難しいから]

(二)衢地:他の国々と三方で接続している土地では、天下の諸侯と親交を結ぶ。

[地の利を生かして諸国に使節を派遣し、敵国を国際的孤立に追い込む]

(三)絶地:故国から遠く離れた土地には、とどまらず素早く通り過ぎる。

[本国からの補給が困難なため、長期戦を避け、短期決戦を行なう]

(四)圜地:背後が三方とも険しく、前方が細い出口になっている土地では、脱出の計謀をめぐらせる。

[前方に開いている通路に守備隊を派遣して封鎖した上で、後方に撤退する]

(五)死地:背後が三方とも険しく、前方の細い出口に敵が待っている土地では、必死に力戦する。

[全軍一丸となって出口から突出して、切り抜ける]

(六)道路には、そこを經由してはならない道路がある。

[行軍が渋滞する難所があつて、浅く侵入すれば難所の手前で行軍が滞り、

戦闘部隊が無理にその難所を越えて深入りす

一

孫子曰わく、

凡そ用兵の法は、高陵には向かうこと勿かれ、背丘には逆[むか]うること勿かれ、絶地には留まること勿かれ、佯[しょう]北には従うこと勿かれ、鋭卒には攻むること勿かれ、餌兵には食らうこと勿かれ、帰師には遏むること勿かれ、圜師には必らず闕[か]き、窮寇には迫ること勿かれ。此れ用兵の法なり。

二

塗[みち]に由らざる所あり。軍に撃たざる所あり。城に攻めざる所あり。地に争わざる所あり。君命に受けざる所あり。

三

故に将 九変の利に通ずる者は、兵を用うることを知る。

将 九変の利に通ぜざる者は、地形を知ると雖も、地の利を得ること能わず。兵を治めて九変の術を知らざる者は、五利を知ると雖も、人の用を得ること能わず。

ると分断されてしまう道。

後続部隊との接続を確保しようとする立ち止まると捕虜にされてしまう]

(七) 敵軍には、それを攻撃してはならない敵軍がある。

[兵力上は、正面攻撃によって撃破できる目算が充分立っても、

他にもっと巧妙な手があって、労せず撃破できる可能性のある軍]

(八) 城には、それを攻略してはならない城がある。

[1兵力上は充分攻め落とせるが、そこから先の前進に利益なく、守りきれない

2力攻してみても攻略できそうにもなく、前方で勝利を収めれば自然に降伏し、

勝利できなくても後方で自軍の害とならない城]

(九) 土地には、そこを争奪してはならない土地がある。

[水や食料が得られない劣悪な環境で、奪い取ってみても長くは占領維持できない]

君命には、それを受諾してはならない君命がある。だから、将軍の中で九変(九種の応変の対処法)が持つ利益に通曉する者こそは、軍隊の運用法を真にわきまえているのである。

将軍でありながら九変の利益に精通しない者は、たとえ戦場の地形を知ってはいても、その地形がもたらす利益をわがものにすることができない。

軍隊を統率していながら九変の術策を身につけていないようでは、五種の地形への対処法が持つ利益を観念的に知ってはいても、いざその場になると兵士たちの力を存分に駆使することはできない。

<利と害の両面で考える>

こうしたわけで、智者の思慮は、ある一つの事柄を考える場合にも、必ず利と害との両面をつき混ぜて洞察する。利益になる事柄に害の側面をも交えて考えるならば、その事業は必ずねらいどおりに達成できる。害となる事柄に利益の側面も合わせて計り考えるならば、その心配も消すことができる。

そうしたわけで、諸侯の意思を自国の意図の前に屈服させるには、その**害悪ばかりを強調**する。諸侯を使役するには、損害を顧みないほど**魅力的な事業**に乗り出させる。諸侯を奔走させるには、害の側面を隠して**利益ばかりを示す手**を使う。

そこで、戦争の原則としては、敵がやってこない

四

是の故に、智者の慮は必らず利害に雑[まじ]う。利に雜りて而[すなわ]ち務め信なるべきなり。害に雜りて而ち患い解くべきなり。

五

是の故に、諸侯を屈する者は害を以てし、諸侯を役[えき]する者は業を以てし、諸侯を趨[は]しらす者は利を以てす。

六

故に用兵の法は、其の来たらざるを恃[たの]むこと無く、吾れの以て待つ有ることを恃むなり。其の攻めざるを恃むこと無

<p>ことをあてにするのではなく、いつやってきてもいような備えがこちらにあることをあてにする。敵が攻撃してこないことをあてにするのではなく、攻撃できないような態勢がこちらにあることをあてにするのである。</p>	<p>く、吾が攻むべからざる所あるを恃むなり。</p>
<p>●〈指揮官五つの危険〉</p> <p>そこで、将軍には五つの危険がつきまとう。</p> <p>(一) 決死の勇氣だけで思慮に欠ける者は、殺される。 (二) 生き延びることしか頭になく勇氣に欠ける者は、捕虜にされる。 (三) 短気で怒りっぽい者は、侮辱されて計略に引っかかる。 (四) 清廉潔白で名誉を重んじる者は、侮辱されて罾に陥る。 (五) 兵士をいたわる人情の深い者は、兵士の世話に苦勞が絶えない。</p> <p>およそこれら五つは、将軍としての過失であり、軍隊を運営する上で災害をもたらす事柄である。軍隊を滅亡させ、将軍を敗死させる原因は、必ずこれら五つの危険のどれかにある。十分に明察しなければならない。</p>	<p>七</p> <p>故に將に五危あり。必死は殺され、必生は虜にされ、忿速は侮られ、廉白は辱められ、愛民は煩さる。凡そ此の五つの者は將の過ちなり、用兵の災いなり。軍を覆し將を殺すは必らず五危を以てす。察せざるべからざるなり。</p>



九 行軍篇〈敵情を見抜く〉

<p>●〈行軍の秘訣〉</p> <p>およそさまざまな地形の上に軍隊を配置し、敵情を偵察するのに、</p> <p>(一) 山を越えるには谷沿いに進み、高みを見つけては高地に休息場所を占める。戦闘に入る際には高地から攻め下るようにして、決して自軍より高い地点を占拠する敵に向かって攻め上がりしてはならない。これが<u>山岳地帯</u>にいる軍隊についての注意である。</p> <p>(二) 川を渡り終えたならば、必ずその川から遠ざかる。敵が川を渡って攻撃してきたときには、敵軍がまだ川の中にいる間に迎え撃ったりせず、敵兵の半数を渡らせておいてから攻撃するのが有利な戦法である。渡河してくる敵と戦闘しようとする場合は、川岸まで出かけて敵を攻撃してはならない。これが<u>河川のほとり</u>にいる軍隊についての注意である。</p> <p>(三) 沼沢地を越える場合には、素早く通過するようにして、そこで休息したりしてはならない。もし敵と遭遇し、沼沢地の中で戦う事態になったならば、飲料水と飼料の草がある近辺を占めて、森林を背に配して布陣せよ。これが<u>沼沢地</u>にいる軍隊についての注意である。</p>	<p>一</p> <p>孫子曰わく、 凡そ軍を処[お]き敵を相[み]ること。 山を絶つには谷に依り、生を視て高きに処り、隆[たか]き戦いては登ること無かれ。此れ山に処るの軍なり。 水を絶てば必らず水に遠ざかり、客 水を絶ちて来たらば、これを水の内に迎うる勿く、半ば済[わた]らしめてこれを撃つは利なり。戦わんと欲する者は、水に附きて客を迎うること勿かれ。生を視て高きに処り、水流を迎うること無かれ、此れ水上に処るの軍なり。 斥沢を絶つには、惟だ亟[すみ]やかに去って留まること無かれ。若し軍を斥沢の中に交うれば、必らず水草に依りて衆樹を背[はい]にせよ。此れ斥沢に処るの軍なり。 平陸には易に処りて而して高きを右背にし、死を前にして生を後にせよ。此れ平陸に処るの軍なり。 凡そ此の四軍の利は、黄帝の</p>
---	---

(四)平地では、足場のよい平坦な場所を占めて、丘陵を右後方におき、低地を前方に、高みを後方に配して布陣せよ。これが平地にいる軍隊についての注意である。

およそこの四種の地勢にいる軍隊に関する戦術的利益こそは、黄帝が四人の帝王に打ち勝った原因なのである。

およそ、軍隊をとどめるには、

高地はよいが低地は悪い。

日当たりのよいところがすぐれるが、日当たりの悪い所は劣る。

健康に留意して、水や草の豊富な場所におり、軍隊に種々の疾病が起こらないのが、必勝の軍である。

丘陵や堤防などでは、必ずその東南にいて、それが背後と右手となるようにする。これが戦争の利益になることで、地形の援助である。

上流が雨で、川が泡だって流れているときは、洪水の恐れがあるから、もし渡ろうとするなら、その流れの落ち着くのを待ってからにせよ。

およそ地形に、絶壁の谷間(絶澗)・自然の天井(天井)・自然の牢獄(天牢)・自然の取り網(天羅)・自然の陥し穴(天陷)・自然のすきま(天隙)のあるときは、必ず速くそこを立ち去って、近づいてはならない。こちらではそこから遠ざかって、敵にはそこに近づくように仕向ける。こちらではその方に向かい、敵はそこが背後になるように仕向ける。

軍隊の近くに、険しい地形・池・窪地・芦の原・山林・草木の繁茂したところがあるときには、必ず慎重に繰り返して搜索せよ。これらは伏兵や偵察隊のいる場所である。

敵が自軍の近くにいながら平然と静まり返っているのは、彼らが占める地形の険しさを頼りにしているのである。

敵が自軍から遠く離れているにもかかわらず、戦いを仕掛けて、自軍の進撃を願うのは、彼らの戦列を敷いている場所が平坦で有利だからである。

多数の木立がざわめき揺らぐのは、敵軍が森林の中を移動して進軍してくる。

あちこちに草を結んで覆い被せてあるのは、伏兵の存在を疑わせようとしている。

草むらから鳥が飛び立つのは、伏兵が散開している。

獣が驚いて走り出てくるのは、森林に潜む敵軍の奇襲攻撃である。

四帝に勝ちし所以なり。

二

凡そ軍は高きを好みて下[ひく]きを悪[にく]み、陽を貴びて陰を賤しむ。生を養いて実に処り、軍に百疾なきは、是れを必勝と謂う。丘陵堤防(堤はごごとへん)には必らず其の陽に処りて而してこれを右背にす。此れ兵の利、地の助けなり。

三

上に雨ふりて水沫至らば、涉らんと欲する者は、其の定まるを待て。

四

凡そ地に絶澗・天井[せい]・天牢・天羅・天陷・天隙あらば、必らず亟かにこれを去りて、近づくこと勿かれ。吾れはこれに遠ざかり、敵にはこれに近づかしめよ。吾れはこれを迎え、敵にはこれに背せしめよ。

五

軍の傍に陰阻・こう[水黄]井・葭葦[かい]・山林・えい[艸十翳]薈[わい]ある者は、必らず謹んでこれを覆索せよ、此れ伏姦の処る所なり。

六

敵近くして静かなる者は其の險を恃むなり。遠くして戦いを挑む者は人の進むを欲するなり。其の居る所の易なる者は利するなり。衆樹の動く者は来たるなり。衆草の障多き者は疑なり。鳥の起つ者は伏なり。獣の駭[おどろ]く者は覆[ふう]なり。塵高くして鋭き者は車の来たるなり。卑くして広き者は徒の来たるなり。散じて条達する者は樵採なり。少なくして往来する者は軍を営むなり。

七

辞の卑[ひく]くして備えを益す者は進むなり。辞の強くして進駆する者は退くなり。約なくして和を請う者は謀なり。軽車の先ず出でて其の側に居る者は陳するなり。奔走して兵を陳[つら]ぬる者は期するなり。半進半退する者は誘うなり。

砂塵が高く舞い上がって、筋の先端がとがっているのは、戦車部隊が進撃してくる。

砂塵が低く垂れ込めて、一面に広がっているのは、歩兵部隊が進撃してくる。

砂塵があちらこちらに分散して、細長く筋を引くのは、薪を集めている。

砂塵の量が少なくて行ったり来たりするのは、設営隊が軍営を張る作業をしている。

敵の軍使の口上がへりくだっていて、防備が増強されているのは、進撃の下工作。

敵の軍使の口上が強硬で、先頭部隊が侵攻してくるのは、退却の下工作。

隊列から軽戦車が真っ先に抜け出して、敵軍の両側を警戒しているのは、行軍隊形を解いて陣立てをしている。

敵の急使が、窮迫した事情もないのに和睦を懇願してくるのは、油断させようとする陰謀である。

伝令があわただしく走り回って、各部隊を整列させているのは、会戦を決意している。

敵の部隊が中途半端に進撃してくるのは、自軍を誘い出そうとしている。

兵士が杖をついて立っているのは、その軍が飢えて弱っている。

水くみが水をくんで真っ先に飲むのは、その軍が飲料に困っている。

利益を認めながら進撃してこないのは、疲労している。

鳥がたくさん止まっているのは、その陣所に人がいない。

夜に呼び叫ぶ声のするのは、その軍が臆病で怖がっている。

軍営の騒がしいのは、将軍に威厳がない。

旗が動揺しているのは、その備えが乱れた。

役人が腹を立てているのは、その軍がくたびれている。

馬に兵糧米を食べさせ、兵士に肉食させ、軍の鍋釜の類はみな打ち壊して、その幕舎に帰ろうともしないのは、行きづまって死にものぐるいになった敵である。

ねんごろにおずおずと物静かに兵士たちと話をしているのは、みんなの心が離れている。

しきりに賞を与えているのは、その軍の士気がふるわなくて困っている。

しきりに罰しているのは、その軍が疲れている。

はじめは乱暴に扱っておきながら、あとにはその兵士たちの離反を恐れるのは、考えの行き届かない極みだ。

わざわざやってきて贈り物を捧げて謝るといのは、しばらく軍を休めたい。

敵軍がいきり立って向かってきながら、しばらくしても合戦せず、また撤退もしないのは、必ず慎重に観察せよ。

戦争は兵員が多いほどよいというものではな

八

杖[つえつ]きて立つ者は飢うるなり。汲みて先ず飲む者は渴するなり。利を見て進まざる者は勞[つか]るなり。鳥の集まる者は虚しきなり。夜呼ぶ者は恐るなり。軍の擾[みだ]る者は将の重からざるなり。旌旗の動く者は乱るなり。吏の怒る者は倦みたるなり。馬に粟[ぞく]して肉食し、軍に懸ふ[卸一] [十瓦]なくして其の舎に返らざる者は窮寇なり。諄々翕々[じゅんじゅんきゆうきゆう]として徐[おもむろ]に人と言[かた]る者は衆を失うなり。数[しばしば]賞する者は窘[くる]しむなり。数罰する者は困[つか]るなり。先きに暴にして後に其の衆を畏る者は不精の至りなり。来たりて委謝する者は休息を欲するなり。兵怒りて相い迎え、久しくして合わず、又た解き去らざるは、必らず謹しみてこれを察せよ。

九

兵は多きを益ありとするに非ざるなり。惟だ武進することなく、力を併わせて敵を料[はか]らば、以て人を取るに足らんのみ。夫れ惟だ慮[おもんばか]り無くして敵を易[あなど]る者は、必らず人に擒にせらる。卒未だ親附せざるに而もこれを罰すれば、則ち服せず。服せざれば則ち用い難きなり。卒已[すで]に親附せるに而も罰行なわれざれば、則ち用うべからざるなり。故にこれを合するに文を以てし、これを齊[ととの]うるに武を以てする、是れを必取と謂う。令 素[もと]より行なわれて、以て其の民を教うれば則ち民服す。令 素より行なわれずして、以て其の民を教うれば則ち民服せず。令の素より信なる者は衆と相い得るなり。

い。ただ、猛進しないようにして、わが戦力を集中して敵情を考えはかっていくなら、十分に勝利を収めることができよう。

そもそも、よく考えることもしないで敵を侮っている者は、きっと敵の捕虜にされるであろう。

兵士たちがまだ将軍に親しみなついていないのに懲罰を行なうと、彼らは心服しない。心服しないと働かせにくい。ところが、兵士たちがもう親しみなついているのに懲罰を行なわないでいると、威令がふるわず、彼らを働かせることはできない。だから、軍隊では御徳でなづけ、刑罰で統制する。これを必勝の軍という。

法令がふだんからよく守られていて、それで兵士たちに命令するのなら、兵士たちは服従する。法令がふだんからよく守られていないのに、それで兵士たちに命令するのでは、兵士たちは服従しない。法令がふだんから誠実なものは、民衆とぴったり心が一つになっているのである。



十 地形篇〈六種の地形をどう利用するか〉

㊦〈地形に適した戦術をとる〉

戦場の地形には、

- 1: 四方に広く通じ開けている
- 2: 途中に行軍が渋滞する難所を控えている
- 3: 脇道が分岐している
- 4: 道幅が急にせばまっている
- 5: 高く険しい
- 6: 両軍の陣地が遠くかけ離れている

ものがある。

(一)わが方からも自由に行けるし、敵方からも自由にこれるのは「**通じ開けている**」地形と呼ぶ。通じ開けた地形では、敵軍よりも先に高地の南側に陣取って、食料の補給路を有利に確保する形で戦えば、有利になる。

(二)その道に沿って進むことは何とかできても、引き返すのが難しいのは、「**途中で引っかかる難所がある**」地形と呼ぶ。難所を控えた地形では、難所の向こう側に敵の防御陣地がない場合には、難所を越えて出撃して勝てる。もし、敵の防御陣地が存在する場合には、出撃しても勝てず、再び難所を越えて引き返すのも難しくなって、不利である。

(三)わが方が先に進出しても不利になるし、敵方が先に進出しても不利になるのは、「**脇道が分岐している**」地形と呼ぶ。脇道が枝分かれしている地形では、たとえ敵が自軍に進出の利益を示し

一

孫子曰わく、
地形には、通ずる者あり、挂[さまた]ぐる者あり、支[わか]るる者あり、隘[せま]き者あり、陰なる者あり、遠き者あり。

我れ以て往くべく疲れ以て来たるべきは曰[すなわ]ち通ずるなり。通ずる形には、先ず高陽に居り、糧道を利して以て戦えば、則ち利あり。

以て往くべきも以て返り難きは曰ち挂ぐるなり。挂ぐる形には、敵に備え無ければ出でてこれに勝ち、敵若し備え有れば出でて勝たず、以て返り難くして不利なり。

我れ出でて不利、彼れも出でて不利なるは、曰ち支るるなり。支るる形には、敵 我れを利すと雖も、我れ出ずること無かれ。引きてこれを去り、敵をして半ば出でしめてこれを撃つは利なり。

隘き形には、我れ先ずこれに居れば、必らずこれを盈たして以て敵を待つ。若し敵先ずこれに居り、盈つれば而ち従うこと勿かれ、盈たざれば而ちこれに従え。

陰なる形には、我れ先ずこれに居れば、必ず高陽に居りて以

て誘っても、それにつられてわが方から先に進出しない。軍を後退させて分岐点を離れ、逆に敵軍の半数を、分岐点を過ぎて進出させておいてから攻撃するのが有利である。

(四) 両側から岩壁が張り出して、急に道幅がせばまっている地形では、わが方が先にその地点を占拠していれば、その隘路上に必ず兵力を密集させておいてから、敵の来攻を待ち受けよ。もし、敵が先にその地点を占拠していて、しかも敵の兵力がその隘路上に隙間なく密集している場合には、そこへ攻めかかってはならない。たとえ敵が先に占領していても、その隘路上を、敵の兵力が埋めつくしていない場合には、攻めかかれ。

(五) 高く険しい地形では、わが方が先にその地点を占拠している場合には、必ず高地の南側に陣取った上で、敵の来攻を待ち受けよ。もし、敵の側が先にその地点を占拠している場合には、軍を後退させてその場を立ち去り、その敵軍に攻めかかってはならない。

(六) 双方の陣地が遠く隔たっている地形では、戦勢が互角な場合は、自分の方から出陣して先に戦いを仕掛けるのは困難であり、無理に出かけていって戦闘すれば、不利になる。

およそこれら六つの事柄は、地形についての道理である。将軍の最も重大な任務であるから、明察しなければならない。

そこで、軍隊には

- 1: 逃亡する
- 2: ゆるむ
- 3: 落ち込む
- 4: 崩れる
- 5: 乱れる
- 6: 負けて逃げる

のがある。すべてこれら六つのことは、自然の災害ではなくて、将軍たる者の過失によるのである。

(一) そもそも軍の威力がどちらも等しいときに、十倍も多い敵を攻撃するのは、戦うまでもなく逃げ散らせる。

(二) 兵士たちの実力が強くて、取り締まる役人の弱いのは、軍をゆるませる。

(三) 取締りの役人が強くて、兵士の弱いのは、軍を落ち込ませる。

(四) 役人の頭が怒って将軍の命令に服従せず、敵に遭遇しても恨み心を抱いて、自分勝手な戦いをし、将軍はまた彼の能力を知らないというのは、軍を突き崩す。

て敵を待つ。若し敵先ずこれに居れば、引きてこれを去りて従うこと勿かれ。

遠き形には、勢い均しければ以て戦いを挑み難く、戦えば而ち不利なり。

凡そこの六者は地の道なり。将の至任にして察せざるべからざるなり。

二

故に、兵には、走る者あり、弛む者あり、陥る者あり、崩るる者あり、乱るる者あり、北[に]ぐる者あり。凡そ此の六者は天の災に非ず、将の過ちなり。

夫れ勢い均しきとき、一を以て十を撃つは日ち走るなり。

卒の強くして吏の弱気は日ち弛むなり。

吏の強くして卒の弱きは日ち陥るなり。

大吏怒りて服せず、敵に遭えばうら[対心]みて自ら戦い、将は其の能を知らざるは、日ち崩るるなり。

将の弱くして敵ならず、教道も明らかならずして、吏卒は常なく兵を陳[つら]ぬること縦横[しようおう]なるは、日ち乱るるなり。

将 敵を料ること能わず、小を以て衆に合い、弱を以て強を撃ち、兵に選鋒なきは、日ち北ぐるなり。

凡そこの六者は敗の道なり。将の至任にして察せざるべからざるなり。

(五) 将軍が軟弱で厳しさがなく、軍令もはっきりしないで、役人兵士たちにもきまりがなく、陣立てもデタラメなのは、乱れさせる。

(六) 将軍が敵情を考えはかることができず、小勢で大勢の敵と合戦し、弱勢で強い敵を攻撃して、軍隊の先鋒に選びすぐった勇士もいないのは、負けて逃げさせる。

すべてこれら六つのことは、敗北についての道理である。将軍の最も重要な責務として十分に考えなければならないことである。

🔴(指導者の理想像)

そもそも土地の形状は、軍事行動の補助要因である。敵情をはかり考えては勝利の形を策定しつつ、地形が陰しいか平坦か、遠いか近いかを検討して、勝利実現の補助手段に利用していくのが、全軍を指揮する上將軍の踏むべき行動基準である。こうしたやり方を熟知して戦闘形式を用いる者は必ず勝つが、こうしたやり方を自覚せずに戦闘形式を用いる者は、必ず敗れる。

そこで、戦闘の道理として自軍に絶対の勝算があるときには、たとえ主君が戦闘してはならないと命じても、ためらわず戦闘してかまわない。

戦闘の道理として勝算がないときには、たとえ主君が絶対に戦闘せよと命じても、戦闘しなくてかまわない。

したがって、君命を振り切って戦闘に突き進むときでも、決して功名心からそうするのではない。君命に背いて戦闘を避けて退却するときでも、決して誅罰をまぬがれようとせずに、ひたすら民衆の生命を保全しながら、しかも結果的にそうした行動が君主の利益にもかなう。このような将軍こそは、国家の財宝である。

将軍が兵士を治めていくのに、兵士たちを赤ん坊のように見て、万事に気をつけていたわっていくと、それによって兵士たちと一緒に深い谷底のような危険な土地にも行けるようになる。

兵士たちをかわいいわが子のように見て、深い愛情で接していくと、それによって兵士たちと生死をともにできるようになる。

しかし、もし手厚くするだけで仕事をさせることができず、かわいがるばかりで命令することもできず、デタラメをしてもそれを止めることができないのでは、たとえてみればおごりたかぶった子供のように、ものの用にたたない。

味方の兵士に、敵を攻撃して勝利を収められる力があることがわかって、敵の方に備えがあつて、攻撃してはならない状況があることを知っていなければ、必ず勝つとは限らない。

三

夫れ地形は兵の助けなり。敵を料って勝を制し、陰夷・遠近を計るは、上将の道なり。此れを知りて戦いを用[おこ]なう者は必ず勝ち、此れを知らずして戦いを用なう者は必ず敗る。故に戦道必ず勝たば、主は戦う無かれと曰うとも必ず戦いて可なり。戦道勝たずんば、主は必ず戦えと曰うとも戦う無くして可なり。故に進んで名を求めず、退いて罪を避けず、唯だ民を是れ保ちて而して利の主に合は、国の宝なり。

四

卒を視ること嬰兒の如し、故にこれと深谿に赴むくべし。卒を視ること愛子の如し、故にこれと俱に死すべし。厚くして使うこと能わず、愛して令すること能わず、乱れて治むること能わざれば、譬えば驕子の若く、用うべからざるなり。

五

吾が卒の以て撃つべきを知るも、而も敵の撃つべからざるを知らざるは、勝の半ばなり。敵の撃つべきを知るも、而も吾が卒の以て撃つべからざるを知らざるは、勝の半ばなり。敵の撃つべきを知り吾が卒の以て撃つべきを知るも、而も地形の以て戦うべからざるを知らざるは、勝の半ばなり。故に兵を知る者は、動いて迷わず、挙げて窮せず。

故に曰わく、彼れを知りて己れを知れば、勝 乃ち殆[あや]うからず。地を知りて天を知れば、勝 乃ち全うすべし。

敵に隙があつて、攻撃できる状況があることがわかって、味方の兵士が攻撃をかけるのに十分でないことがわかっていなければ、必ず勝つとは限らない。

敵に隙があつて攻撃できることがわかり、味方の兵士にも敵を攻撃する力のあることはわかって、土地のありさまが戦つてはならない状況であることを知るのだから、必ず勝つとは限らない。

だから、戦争のことに通じた人は、敵・味方・土地のことをわかつた上で行動を起こすから、軍を動かして迷いがなく、合戦しても苦しむことがない。だから、「敵情を知つて、味方の事情も知つておれば、そこで勝利に揺るぎがない。土地のことを知つて、自然界のめぐりのことも知つておれば、そこでいつでも勝てる」といわれるのである。



by ISHIHARA Mitsumasa 石原光将



中華的戦略戦術

孫子の兵法 4 各論(2)

十一 九地篇〈脱兎のごとく進攻せよ〉

九種の地勢とその戦術

土地の形状とは、軍事の補助要因である。そこで軍を運用する方法には、

- 1: 散地(軍の逃げ去る土地)
- 2: 軽地(軍の浮き立つ土地)
- 3: 争地(敵と奪い合う土地)
- 4: 交地(往来の便利な土地)
- 5: 衢〔く〕地(四通八達の中心地)
- 6: 重地(重要な土地)
- 7: 泛〔はん〕地(軍を進めにくい土地)
- 8: 困地(困まれた土地)
- 9: 死地(死すべき土地)

がある。

- (一) 諸侯が自国の領内で戦うのが、散地である。
- (二) 敵国内に侵入しても、まだ深入りしていないのが、軽地である。
- (三) 自軍が奪い取れば味方に有利となり、敵軍が奪い取れば敵に有利になるのが、争地である。
- (四) 自軍も自由に行くことができ、敵軍も自在に来ることができるのが、交地である。
- (五) 諸侯の領地が三方に接続していて、そこに先着すれば、諸国とよしみを通じて天下の人々の支援が得られるのが、衢地である。
- (六) 敵国奥深く侵入し、多数の敵城を後方に背負っているのが、重地である。
- (七) 山林や沼沢地を踏み越えるなど、およそ進軍が難渋する経路であるのが、泛地である。
- (八) それを経由して中へ入り込む通路は狭く、それを伝ってそこから引き返す通路は曲がりくねって遠く、敵が寡兵で味方の大部隊を攻撃できるのが、困地である。
- (九) 突撃が迅速であれば生き延びるが、突撃が遅れればたちまち全滅するのが、死地である。

したがって、

- 1: 散地では、戦闘してはならない。
- 2: 軽地では、ぐずぐずしてはならない。
- 3: 争地では、敵に先にそこを占拠された場合には攻めかかってはならない。
- 4: 交地では、全軍の隊列を切り離してはならない。
- 5: 衢地では、諸侯たちと親交を結ぶ。
- 6: 重地では、敵情を巻いたりせずすばやく

一
孫子曰わく、
兵を用うるには、散地あり、軽地あり、争地あり、交地あり、衢〔く〕地あり、重地あり、ひ〔土己〕地あり、困地あり、死地あり。

諸侯自ら其の地に戦う者を、散地と為す。

人の地に入りて深からざる者を、軽地と為す。

我れ得たるも亦た利、彼得るも亦た利なる者を、争地と為す。

我れ以て往くべく、彼れ以て来たるべき者を、交地と為す。

諸侯の地四属し、先ず至って天下の衆を得る者を、衢地と為す。

人の地に入ること深く、城邑に背くこと多き者を、重地と為す。

山林・陰阻・沮沢、凡そ行き難きの道なる者を、〔土己〕地と為す。

由りて入る所のもの隘く、従って帰る所のもの迂にして、彼れ寡にして以て吾の衆を撃つべき者を、困地と為す。

疾戦すれば則ち存し、疾戦せざれば則ち亡ぶ者を、死地と為す。

是の故に、散地には則ち戦うこと無く、軽地には則ち止まること無く、争地には則ち攻むること無く、交地には則ち絶つこと無く、衢地には則ち交を合わせ、重地には則ち掠め、〔土己〕地には則ち行き、困地には則ち謀り、死地には則ち戦う。

二

古えの善く兵を用うる者は、能く敵人をして前後相い及ばず、衆寡相い恃まず、貴賤相い救わず、上下相い扶けず、卒離れて集まらず、兵合して齊わざらむ。利に合えば而ち動き、利に合わざれば而ち止まる。

三

敢えて問う、敵 衆整にして将〔まさ〕に来たらんとす。これを待

通り過ぎる。

7: 泛地では、軍を宿営させずに先へ進める。

8: 困地では、潰走の危険を防ぐ策謀をめぐらせる。

9: 死地では、間髪をいれずに死闘する。

昔の戦争の達人は、敵軍に前軍と後軍との連絡ができないようにさせ、大部隊と小部隊とが助け合えないようにさせ、身分の高い者と低い者とが互いに救い合わず、上下の者が互いに助け合えないようにさせ、兵士たちが離散して集合せず、集合しても整わないようにさせた。こうして、味方に有利な状況になれば行動を起こし、有利にならなければまたの機会を待ったのである。

Q: 敵が秩序だった大軍でこちらを攻めようとしているときには、どのようにしてそれに対処したらよからうか。

A: 相手に先んじて、敵の大切にしているものを奪取すれば、敵はこちらの思いどおりになるだろう。戦争の実状は迅速が第一である。敵の準備中を利用して、思いがけない方法を使い、敵の備えのない所を攻撃することだ。

④〈敵国深く進入せよ〉

およそ、敵国内に進行する方法としては、

徹底的に奥深くまで進攻してしまえば、兵士が結束するから、散地で戦う迎撃軍は対抗できない。

肥沃な土地で掠奪すれば、全軍の食料も充足する。

慎重に兵士たちを休養させては疲労させないようにし、士気をついにまとめ、戦力を蓄え、複雑に軍を移動させては策謀をめぐらせて、自軍の兵士たちが目的地を推測できないように細工しながら、最後に軍を八方ふさがりの状況に投げ込めば、兵士たちは死んでも敗走したりはしない。どうして死にもものぐるいの勇戦が実現されないことがあるか。士卒はともに死力を尽くす。

兵士たちは、あまりにも危険な状況にはまりこんでしまうと、もはや危険を恐れなくなる。

どこにも行き場がなくなってしまうと、決死の覚悟を固める。

敵国内に深く入り込んでしまうと、一致団結する。

逃げ場のない窮地に追いつめられてしまうと、奮戦力闘する。

だから、そうした絶体絶命の外征軍は、ことさらに指揮官が調教しなくても、自分たちで進んで戒め合う。

口に出して要求しなくても、期待通りに動く。

いさかいを禁ずる約束を交わさせなくても、自主的に親しみ合う。

軍令の罰則で脅かさなくても、任務を忠実に果

つこと若何。

曰わく、先ず其の愛する所を奪わば、則ち聴かん。兵の情は速を主とす。人の及ばざるに乗じて不虞の道に由り、其の戒めざる所を攻むるなりと。

四

凡そ客たるの道、深く入れば則ち専らにして主人克たず。饒野に掠むれば三軍も食に足る。謹め養いて労すること勿く、気を併わせ力を積み、兵を運らして計謀し、測るべからざるを為し、これを往く所なきに投ずれば、死すとも且[は]た北[に]げず。士人 力を尽す、勝焉んぞ得ざらんや。兵士は甚だしく陥れば則ち懼れず、往く所なければ則ち固く、深く入れば則ち拘し、已むを得ざれば則ち闘う。是の故に其の兵、修めずして戒め、求めずして得、約せずして親しみ、令せずして信なり。祥を禁じ疑いを去らば、死に至るまで之[ゆ]く所なし。吾が士に余財なきも貨を悪[にく]むには非ざるなり。余命なきも寿を悪むには非ざるなり。令の発するの日、士卒の坐する者は涕[なみだ]襟を霑[うるお]し、偃[えん]臥する者は涕 頤[あご]に交わる。これを往く所なきに投ずれば、諸・かい[歳リ]の勇なり。

五

故に善く兵を用うる者は、譬えば率然の如し。率然とは常山の蛇なり。其の首を撃てば則ち尾至り、其の尾を撃てば則ち首至り、其の中を撃てば則ち首尾俱に至る。

たす。

軍隊内での占いごとを禁止して、僥倖が訪れて生還できるのではないかとの疑心を取り除くならば、戦死するまで決して逃げ出したりはしない。

わが軍の兵士たちが余分な財貨を持ち歩かないからといって、それは何も財貨を嫌ってのことではない。今ここで死ぬ以外に他の死に方を考えないからといって、それは何も長生きを嫌ってのことではない。

決戦の命令が発せられた日には、兵士たちの座り込んでいる者は、ぼたぼたとこぼれ落ちる涙のしずくで襟をぬらし、横たわっている者は、両目からあふれ出る涙の筋が、頬を伝ってあごの先に結ぶ。こうした決死の兵士たちを、どこにも行き場のない窮地に投入すれば、全員が勇敢になるのである。

そこで、戦争の上手な人は、たとえば率然{そつぜん}のようなものである。率然というのは、常山にいる蛇のことである。その頭を撃つと尾が助けに来るし、その尾を撃つと頭が助けに来るし、その腹を攻撃すると頭と尾とで一緒にかかってくる。

Q: 軍隊はこの率然のようにすることができるか。

A: できる。

そもそも、呉の国の人と越の国の人とは互いに憎みあう仲であるが、それでも一緒に同じ船に乗って(呉越同舟)、川を渡り、途中で大風にあった場合には、彼らは左手と右手との関係のように密接に助け合うものである。

こういうわけで、馬をつなぎ止め、車輪を土に埋めて陣固めをしてみても、決して十分に頼りになるものではない。軍隊を、勇者も臆病者も等しく勇敢に整えるのは、その治め方によるのである。剛強な者も柔弱な者も等しく充分な働きをするのは、土地の形勢の道理によるものである。

だから、戦争の上手な人が、まるで手をつないでいるかのように軍隊を一体にさせ、率然のようにさせるのは、兵士たちを、戦うほかにどうしようもないような条件に置くからである。

将軍たる者の仕事は、もの静かで奥深く、正大でよく整っている。

士卒の耳目をうまくらまして、軍の計画を知らせないようにする。

そのしわざをさまざまに変え、その策謀を更新して、人々に気づかれないようにする。

その駐屯地を転々と変え、その行路を迂回してとって、人々に推測されないようにする。

軍隊を統率して任務を与えるときには、高いところへ登らせてからその梯子を取るように、戻りたくても戻れないようにする。

敢えて問う、兵は率然の如くならしむべきか。

曰わく可なり。夫れ呉人と越人との相い悪むや、其の舟を同じくして済[わた]りて風に遭うに当たりては、其の相い救うや左右の手の如し。是の故に馬を方[つな]ぎて輪を埋むるとも、未だ恃むに足らざるなり。勇を斉[ととの]えて一の若くにするは政の道なり。剛柔皆な得るは地の理なり。故に善く兵を用うる者、手を攜[たずさ]うるが若くにして一なるは、人をして已むを得ざらしむるなり。

六

将軍の事は、静かにして以て幽[ふか]く、正しくして以て治まる。能く士卒の耳目を愚にして、これをして知ること無からしむ。其の事を易[か]え、其の謀を革[あらた]め、人をして識ること無からしむ。其の居を易え其の途を迂にし、人をして慮ることを得ざらしむ。帥[ひき]いてこれと期すれば高きに登りて其の梯を去るが如く、深く諸侯の地に入りて其の機を発すれば群羊を驅るが若し。驅られて往き、驅られて来たるも、之[ゆ]く所を知る莫し。三軍の衆を聚めてこれを陰に投ずるは、此れ将軍の事なり。九地の変、屈伸の利、人情の利は、察せざるべからざるなり。

七

凡そ客たるの道は、深ければ則ち専らに、浅ければ則ち散ず。

国を去り境を越えて師ある者は絶地なり。四達する者は衢地なり。入ること深き者は重地なり。入ること浅き者は軽地なり。背は固にして前は隘なる者は困地なり。往く所なき者は死地なり。

是の故に散地には吾れ将[まさ]に其の志を一にせんとす。軽地には吾れ将にこれをして属[つづ]かしめんとす。争地には吾れ将に其の後を趨[うなが]さんとす。交地には吾れ将に其の守りを謹しまんとす。衢地には吾れ将に其の結びを固くせんとす。重地には吾れ将に其の食を継がんとす。[土己]地には吾れ将に其の塗[みち]を進めんと

深く外国の土地に入り込んで決戦を起こすときには、羊の群れを追いやるように、兵士たちを従順にする。

追いやられてあちこちと往来するが、どこに向かっているかは誰にもわからない。全軍の大部隊を集めて、そのすべてを決死の意気込みにするような危険な土地に投入する。それが將軍たる者の仕事である。

九とおりの土地の形勢に応じた変化、状況によって軍を屈伸させることの利害、そして人情の自然な道理については、充分に考えなければならない。

およそ、敵国に進撃した場合のやり方としては、深く入り込めば団結するが、浅ければ逃げ去るものである。

- 1: 本国を去り、国境を越えて軍を進めた所は、**絶地**である。
- 2: 絶地の中で、四方に通ずる中心地が、**衢地**である。
- 3: 深く進入した所が、**重地**である。
- 4: 少し入っただけの所が、**軽地**である。
- 5: 背後が陰しくて、前方が狭いのが、**困地**である。
- 6: 行き場のないのが**死地**である。

散地ならば、兵士たちが離散しやすいから、自分は兵士たちの心を統一しようとする。

軽地ならば、軍がうわついているから、自分は軍隊を離れないように連続させようとする。

争地ならば、先に得た者が有利であるから、自分は遅れている部隊を急がせようとする。

交地ならば、通じ開けているから、自分は守備を厳重にしようとする。

衢地ならば、諸侯たちの中心地であるから、自分は同盟を固めようとする。

重地ならば、敵地の奥深くであるから、自分は軍の食料を絶やさないようにする。

泛地ならば、行動が困難であるから、早く行き過ぎようとする。

困地ならば、逃げ道が開けられているものであるから、戦意を強固にするために、自分はその逃げ道をふさごうとする。

死地ならば、力いっぱい戦わなければ滅亡するのだから、自分は軍隊にとっても生き延びられないことを認識させようとする。

そこで、兵士たちの心としては、

困まれたなら、命ぜられなくとも抵抗する。
戦わないでおれなくなれば、激闘する。
あまりにも危険であれば、従順になる。

(一) 諸侯たちの腹のうちがわからないのでは、前もって同盟することはできない。

(二) 山林・陰しい地形・沼沢地などの地形がわからないのでは、軍隊を進めることはできない。

す。困地には吾れ將に其の闕[けつ]を塞がんとす。死地には吾れ將にこれに示すに活[い]きざるを以てせんとす。

故に兵の情は、困まるれば則ち禦ぎ、已むを得ざれば則ち闘い、過ぐれば則ち従う。

八

是の故に諸侯の謀を知らざる者は、予め交わること能わず。山林・陰阻・沮沢の形を知らざる者は、軍を行[や]ること能わず。郷導を用いざる者は、地の利を得ること能わず。此の三者、一を知らざれば、霸王の兵には非ざるなり。夫れ霸王の兵、大国を伐つときは則ち其の衆聚まることを得ず、威敵に加わるときは則ち其の交合することを得ず。是の故に天下の交を争わず、天下の権を養わず、己れの私を信[の]べて、威は敵に加わる。故に其の城は抜くべく、其の国は墮[やぶ]るべし。無法の賞を施し、無政の令を懸くれば、三軍の衆を犯[もち]うること一人を使うが若し。これを犯うるに事を以てして、告ぐるに言を以てすること勿かれ。これを亡地に投じて然る後に存し、これを死地に陥れて然る後に生く。夫れ衆は害に陥りて然る後に能く勝敗を為す。

(三)その土地の案内役を使えないのでは、地形の利益を収めることはできない。

これら三つのことは、その一つでも知らないのでは、霸王の軍ではない。

そもそも、霸王の軍は、もし大国を討伐すれば、その大国の大部隊も集合することができない。もし威勢が敵国をおおえば、その敵国は孤立して、他国と同盟することができない。こういうわけで、天下の国々との同盟を務めることをせず、また天下の権力を自分の身に積み上げることもしないでも、自分の思いどおり勝手にふるまっていて、威勢は敵国をおおっていく。だから、敵の城も落とせるし、敵の国も破れるのである。

ふつうのきまりを越えた重賞を施し、ふつうの定めにかたわらない禁令を掲げるなら、全軍の大部隊を働かせるのも、ただの一人を使うようなものである。

軍隊を働かせるのは、任務を与えるだけにし、その理由を説明してはならない。

軍隊を働かせるのは、有利なことだけを知らせ、その害になることを告げてはならない。

誰にも知られずに、軍隊を滅亡すべき状況に投げ入れてこそ、はじめて滅亡を逃れる。死すべき状況に陥れてこそ、はじめて生き延びる。そもそも、兵士たちは、そうした危難に陥ってこそ、はじめて勝敗を自由にすることができるものである。

㊦くはじめは処女のごとく、後は脱兎のごとく

戦争を遂行する上での要点は、敵の意図に順応して調子を合わせるころにある。

敵の進路と行程に歩調を合わせて進軍して、敵軍と同一の目的地を目指し、千里もの遠方で正確に会敵して敵将を倒すのは、これぞ鮮やかな仕事ぶりと呼ぶのである。

こうしたわけだから、ついに開戦の政令が発動された日には、

国境一帯の関所をことごとく封鎖する。
 通行許可証を無効にする。
 敵国の使節の入国を禁止する。
 廟堂の上で廟議をおごそかに行なって、戦争計画に決断を下す。

いよいよ自軍が国境地帯に進出し、敵側が不意を衝かれて防衛線に間隙を生じたならば、

必ずそこから迅速に侵入する。
 敵国がぜひと防衛したがる地点に、先制の偽装攻撃をかける。
 出動してくる敵軍と、ある日時・ある地点で会敵しようとひそかに心を決める。
 先制攻撃地点をひそかに離脱し、全軍黙って

九

故に兵を為すの事は、敵の意を順詳するに在り。并一にして敵に向かい、千里にして将を殺す、此れを巧みに能く事を成す者と謂うなり。是の故に政の挙なわるるの日は、関を夷[とど]め符を折[くだ]きて其の使を通ずること無く、廊廟の上にきび[尸艸属]しくして以て其の事を誅[せ]む。敵人開闔[かいこう]すれば必らず亟[すみや]かにこれに入り、其の愛する所を先きにして微[ひそ]かにこれと期し、踐墨[せんもく]して敵に随[したが]いて以て戦事を決す。是の故に始めは処女の如くにして、敵人 戸を開き、後は脱兎の如くにして、敵人 拒ぐに及ばず。

敵軍の進撃路に調子を合わせて進む。

予定通りに敵軍を捕捉して会戦に入り、一挙に戦争の勝敗を決する。

こうしたわけで、最初のうちは乙女のようにしおらしく控えていて、いざ敵側が侵入口を開けたとたん、あとは追っ手を逃れるウサギのように、一目散に敵国のふところ深く侵攻してしまえば、もはや敵は防ぎようがないのである。



十二(十三) 用間篇〈スパイこそ最重要員〉

㊦〈敵情を察知せよ〉

およそ十万規模の軍隊を編成し、千里の彼方に外征するとなれば、民衆の出費や政府の支出は、日ごとに千金をも消費するほどになり、遠征軍を後方で支えるために朝野を問わずあわただしく動き回り、物資輸送に動員された人民は補給路の維持に疲れ苦しんで、農事に専念できない者たちは七十万戸にも達する。

こうした苦しい状態で、数年にもおよぶ持久戦を続けたのちに、たった一日の決戦で勝敗を争うのである。

それにもかかわらず、間諜に爵位や俸禄や賞金を与えることを惜しんで、決戦を有利に導くために敵情を探知しようとししないのは、不仁の最たるものである。そんなことでは、とても民衆を統率する将軍とはいえず、君主の補佐役ともいえず、勝利の主宰者ともいえない。

だから、聡明な君主や知謀にすぐれた将軍が、軍事行動を起こして敵に勝ち、抜群の成功を収める原因は、あらかじめ敵情を察知するところこそある。事前に情報を知ることが、鬼神から聞き出して実現できるものではなく、天界の事象になぞらえて実現できるものでもなく、天道の理法とつきあわせて実現することもできない。必ず、人間の知性によってのみ獲得できるのである。

㊦〈五種類のスパイ〉

そこで、間諜の使用法には五種類ある。

- 1: 因間
- 2: 内間
- 3: 反間
- 4: 死間
- 5: 生間

これら五種の間諜が平行して諜報活動を行ないながら、互いにそれぞれが位置する情報の伝達経路を知らずにいるのが、神妙な統括法(神紀)と称し、人民を治める君主の貴ぶべき至宝な

一

孫子曰わく、
凡そ師を興こすこと十万、師を出だすこと千里なれば、百姓の費、公家の奉、日に千金を費し、内外騒動して事を操[と]るを得ざる者、七十万家。相い守ること数年にして、以て一日の勝を争う。而るに爵禄百金を愛んで敵の情を知らざる者は、不仁の至りなり。人の将に非ざるなり。主の佐に非ざるなり。勝の主の非ざるなり。故に明主賢將の動きて人に勝ち、成功の衆に出ずる所以の者は、先知なり。先知なる者は鬼神に取るべからず。事に象るべからず。度に験すべからず。必ず人に取りて敵の情を知る者なり。

二

故に間を用うるに五あり。郷間あり。内間あり。反間あり。死間あり。生間あり。五間俱に起こつて其の道を知ること莫し、是れを神紀と謂う。人君の宝なり。

郷間なる者は其の郷人に因りてこれを用うるなり。

内間なる者は其の官人に因りてこれを用うるなり。

反間なる者は其の敵間に因りてこれを用うるなり。

死間なる者は誑[きょう]事を外に為し、吾が間をしてこれを知って敵に伝えしむるなり。

のである。

(五)生間というのは、繰り返し敵国に侵入しては生還して情報をもたらすものである。

(一)因間というのは、敵国の民間人を手づるに諜報活動をさせるものである。

(二)内間というのは、敵国の官吏を手づるに諜報活動をさせるものである。

(三)反間というのは、敵国の間諜を手づるに諜報活動をさせるものである。

(四)死間というのは、虚偽の軍事計画を部外で実演して見せ、配下の間諜にその情報を告げさせておいて、あざむかれて謀略に乗ってくる敵国の出方を待ち受けるものである。

生間なる者は反[かえ]り報ずるなり。

🔴(スパイを使いこなす)

そこで、全軍の中でも、

君主や将軍との親密さでは間諜が最も親しい。

恩賞では間諜に対するものが最も厚い。

軍務では間諜のあつかうものが最も秘密裏に進められる。

君主や将軍が俊敏な思考力の持ち主でなければ、軍事に間諜を役立てることはできない。

部下への思いやりが深くなければ、間諜を期待どおり忠実に働かせることができない。

微妙なことまで察知する洞察力を備えていなければ、間諜のもたらす情報の中の真実を選び出すことができない。

何と測りがたく、奥深いことか。およそ軍事の裏側で、間諜を利用していない分野など存在しないのである。

君主や将軍が間諜と進めていた諜報・謀略活動が、まだ外部に発覚するはずの段階で他の経路から耳に入った場合には、その任務を担当していて秘密を漏らした間諜と、その極秘情報を入手して通報してきた者とは、機密保持のため、ともに死罪とする。

撃ちたいと思う軍隊・攻めたいと思う城・殺したいと思う人物については、必ずその

官職を守る将軍
左右の近臣
奏聞者
門を守る者
宮中を守る役人

の姓名をまず知って、味方の間諜に必ずさらに追求して、それらの人物のことを調べさせる。

敵の間諜でこちらにやってきてスパイをしている者は、つけこんでそれに利益を与え、うまく誘ってこちらにつかせる。そこで反間として用いることが

三

故に三軍の親は間より親しきは莫く、賞は間より厚きは莫く、事は間より密なるは莫し。聖智に非ざれば間を用うること能わず、仁義に非ざれば間を使うこと能わず、微妙に非ざれば間の実を得ること能わず。微なるかな微なるかな、間を用いざる所なし。間事未だ発せざるに而も先ず聞こゆれば、其の間者と告ぐる所の者と、皆な死す。

四

凡そ軍の撃たんと欲する所、城の攻めんと欲する所、人の殺さんと欲する所は、必らず先ず其の守将・左右・謁者・門者・舎人の姓名を知り、吾が間をして必らず索[もと]めてこれを知らしむ。

五

敵間の来たつて我れを間する者、因りてこれを利し、導きてこれを舎せしむ。故に反間得て用うべきなり。是れに因りてこれを知る。故に郷間・内間 得て使うべきなり。是れに因りてこれを知る。故に死間 誑事を為して敵に告げしむべし。是れに因りてこれを知る。故に生間 期の如くならしべし。五間の事は主必らずこれを知る。これを知るは必ず反間に在り。故に反間は厚くせざるべからざるなり。

六

昔、殷の起こるや、伊摯[いし]夏に在り。周の興るや、呂牙殷に在り。故に惟だ明主賢將のみ能く上智を以て間者と為して必らず大功を成す。此れ兵の要にして、三軍の恃みて動く所な

できる。

反間によって敵情がわかるから、**因間**や**内間**も使うことができる。

反間によって敵情がわかるから、**死間**を使って偽りごとをした上で、敵方に告げさせることができる。

反間によって敵情がわかるから、**生間**を計画どおりに働かせることができる。

五とおりの間諜の情報は、君主が必ずそれをわきまえるが、それが知れるもとは、必ず**反間**によってである。そこで、**反間はぜひとも厚遇すべき**である。

昔、殷王朝が始まるときには、建国の功臣伊摯が間諜として敵の夏の国に入り込んだ。

周王朝が始まるときには、建国の功臣呂牙が間諜として敵の殷の国に入り込んだ。

だから、聡明な君主やすぐれた将軍であつてこそ、はじめてすぐれた知恵者を間諜として、必ず偉大な功業を成し遂げることができるのである。この間諜こそ戦争のかなめであり、全軍がそれに頼つて行動するものである。

り。



十三(十二) 火攻篇〈軽々しく戦争を起こすな〉

●〈五種類の火攻め〉

およそ火を用いる攻撃法には五種類ある。

- 1: **火人**(兵士を焼きうちする)
- 2: **火積**(野外の集積所に貯蔵されている物資を焼き払う)
- 3: **火輜**(物資輸送中の輜重部隊を焼きうちする)
- 4: **火庫**(屋内に物資を保管する倉庫を焼き払う)
- 5: **火隧**(敵の補給路、行軍路、橋梁などを炎上させる)

火攻めの実行には、自軍に内応したり、敵軍内に紛れ込んで放火する破壊工作員が当たる。内応者や破壊工作員は、必ず前もって用意しておく。

火を放つには、**適当な時節**がある。放火後、火勢を盛んにするには、**適切な日**がある。

火をつけるのに都合のよい時節とは、**天気が乾燥している時候**のことである。

火災を大きくするのに都合のよい日というのは、**月の宿る場所が、箕・壁・翼・軫の星座と重なる日**のことである。およそ、これら四種類の日は、風が盛んに吹きはじめる日である。

およそ、火攻めは、必ず五とおりの火の変化に従つて、それに呼応して兵を出す。

一

孫子曰わく、
凡そ火攻に五あり。
一に曰わく火人、二に曰わく火積、三に曰わく火輜、四に曰わく火庫、五に曰わく火隊。
火を行なうには必ず**因**あり、火をと[火票]ばすには必ず**素**より具[そな]う。火を発するに**時**あり、火を起こすに**日**あり。時とは天の燥[かわ]けるなり。日とは宿の箕・壁・翼・軫に在るなり。凡そ此の四宿の者は風の起るの日なり。

二

凡そ火攻は、必ず**五火**の変に因りてこれに**応**ず。
火の内に発するときは則ち早くこれに**外**に**応**ず。
火の発して其の兵の静かなる者は、待ちて攻むること勿く、其の火力を極めて、従うべくしてこれに従い、従うべからざるして止む。
火 外より発すべくんば、内に待つことなく、時を以てこれを発す。
火 上風に発すれば、下風を攻むること無かれ。

(一)味方の放火した火が、敵の陣営の中で燃えだしたときには、すばやくそれに呼応して、外から兵をかける。

(二)火が燃えだしたのに敵軍が静かな場合には、しばらく待つことにして、すぐに攻めてはならない。その火勢にまかせて様子をうかがい、攻撃してよければ攻撃し、攻撃すべきでなければやめる。

(三)火を外からかけるのに都合がよければ、陣営の中で放火するのを待たないで、適当な時を見て火をかける。

(四)風上から燃えだしたときには、風下から攻撃してはならない。

(五)昼間の風は利用するが、夜の風はやめる。

およそ、軍隊では必ずこうした五とおりの火の変化のあることをわきまえ、技術を用いてそれを守るべきである。

昼風は従い夜風は止む。

凡そ軍は必らず五火の変あることを知り、数を以てこれを守る。

②<火攻めは水攻めにまさる>

だから、火を攻撃の補助手段にするのは、将軍の頭脳の明敏さによる。

水を攻撃の補助手段にするのは、軍の総合戦力の強大さによる。

水攻めは敵軍を分断することはできても、敵軍の戦力を奪い去ることはできない。

三

故に火を以て攻を佐[たす]くる者は明なり。水を以て攻を佐くる者は強なり。水は以て絶つべきも、以て奪うべからず。

②<死んだ者は帰ってこない>

そもそも戦闘に勝利を収め、攻撃して戦果を獲得したにもかかわらず、それがもたらす戦略的成功を追求しないでだらだら戦争を続けるのは、国家の前途に対して不吉な行為である。これを、国力を浪費しながら外地でぐずぐずしている、と名付ける。

そこで、先を見通す君主は、すみやかな戦争の勝利と終結を熟慮する。

国を利する将軍は、戦争を勝利の中に短期決着させる戦略的成功を追求する。

利益にならなければ、軍事行動を起こさない。勝利を獲得できなければ、軍事力を使用しない。

危険が迫らなければ、戦闘しない。

君主は、一時の怒りの感情から軍を興して戦争を始めてはならない。

将軍は、一時の憤激に駆られて戦闘してはならない。

国家の利益に合えば軍事力を使用する。国家の利益に合致しなければ軍事力の行使を思いとどまる。

怒りの感情はやがて和らいで、また楽しみ喜ぶ心境に戻れる。憤激の情もいつしか消えて、再び快い心境に戻れる。

四

夫れ戦勝攻取して其の功を修めざる者は凶なり。命[なづ]けて費留と曰う。故に明主はこれを慮り、良将はこれを修め、利に非ざれば動かず、得るに非ざれば用いず、危うきに非ざれば戦わず。主は怒りを以て師を興すべからず。将は慍[いきどお]りを以て戦いを致すべからず。利に合えば而ち動き、利に合わざれば而ち止まる。怒りは復た喜ぶべく、慍りは復た悦ぶべきも、亡国は復た存すべからず、死者は復た生くべからず。故に明主はこれを慎み、良将はこれを警[いまし]む。此れ国を安んじ軍を全うするの道なり。

しかし、軽はずみに戦争を始めて敗北すれば、滅んでしまった国家は決して再興できず、死んでいった者たちも二度と生き返らせることはできない。

だから、先見の明を備える君主は、軽々しく戦争を起こさぬよう、慎重な態度で臨む。

国家を利する将軍は、軽率に軍を戦闘に突入させないように自戒する。

これこそが、国家を安泰にし、軍隊を保全する方法なのである。



by ISHIHARA Mitsumasa 石原光将

